

2014

東日本災害ボランティア
第4次福岡大学派遣隊



～未来へ繋ぐ～

目 次

○刊行にあたって	責任者（学生部長）小野寺 一 浩	1
1 第4次派遣隊の活動概要と参加者名簿		3
2 募集から活動報告まで		6
3 被災地での活動内容		8
1. 活動1日目		8
2. 活動2日目		10
3. 活動3日目		14
4. 活動4日目		16
5. 活動5日目		20
4 派遣隊員レポート		21
1. 学生レポート		22
2. 引率者レポート		45
5 活動でお世話になった方々からのメッセージ		48
○第4次派遣隊にご支援ご協力いただいた方々		

刊行にあたって

第4次福岡大学派遣隊
学生部長 小野寺 一 浩

東日本大震災から早くも4年余りが経過しようとしています。復興の歩みは続けられてはいるものの、未だに仮設住宅での生活を余儀なくされるなど、震災前の暮らしを取り戻すにはほど遠い状況にあります。福岡大学では、復興への一助となることを願い、本年度も「第4次福岡大学派遣隊」を被災地に送りました。

2011年3月11日未曾有の大津波が、三陸の地をはじめ東日本を襲いました。その映像が流されるや福岡大学では、多くの学生が大学に被災地救援のために行動したいと申し出てきました。その声に応えるべく、大学では「第1次福岡大学派遣隊」の結成を支援し、事前研修を重ねたうえで被災地に派遣しました。「第1次派遣隊」から本年度の「第4次派遣隊」まで、学生が主体となり、大学が側面から援助するという形で派遣隊の活動は続けられています。

近年、若者のコミュニケーション能力不足をいたる所で耳にします。しかし、被災地で、被災者の方々の生活に思いを馳せながら慣れないスコップを使い、何とか言葉の底にある本当の気持ちを理解しようと努めながら被災者の方々と話す学生を身近にすると、その指摘は必ずしも的確なものではないように思われます。

また、被災地での活動が学生を大きく成長させております。被災地で活動した学生は、「被災者の方々を元気づけようと思っていたが、反対に被災者の方々から元気をいただいた。」と口をそろえて言います。到底言葉では言い表せないような厳しい生活を送られているにもかかわらず、学生ボランティア団体を快く受け入れてくださり、学生に大いなる成長の場を与えてくださった被災者の方々に心より感謝申し上げると同時に一日も早い復興を祈るばかりです。

最後となりましたが、「第4次福岡大学派遣隊」の活動を支えてくださった、多くの方に心より御礼申し上げます。

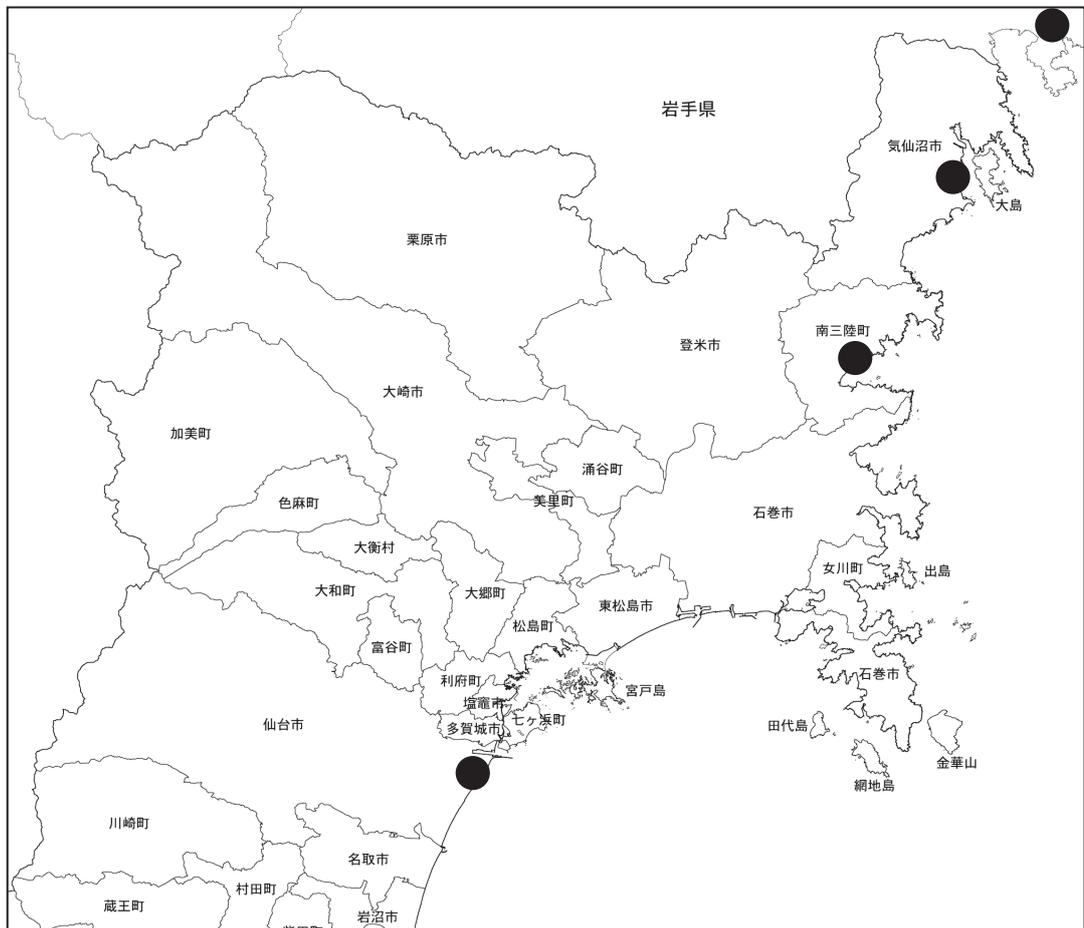
1 第4次派遣隊の活動概要と参加者名簿

1. 概要

派遣期間	2014年8月19日(火)～8月23日(土)
派遣人員	総勢36名(学生32名、教職員4名)
派遣先	宮城県南三陸町、気仙沼市、岩手県陸前高田市
主な活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・上山八幡宮参拝および神主による講話、被災体験の紙芝居の講演 ・南三陸町でのがれき撤去作業 ・南三陸町椿プロジェクトでの清掃活動 ・南三陸町町長表敬訪問 ・南三陸町カキ養殖出荷作業 ・陸前高田市遺留品搜索作業 ・南最知仮設住宅の清掃および住民の方々との交流 ・面瀬小学校での交流・学習支援 ・石巻市漁業支援 ・東北学院大学での活動報告およびグループディスカッション

2. 活動場所

・宮城県南三陸町、気仙沼市、仙台市、岩手県陸前高田市



3. 活動行程

東日本災害ボランティア「第4次福岡大学派遣隊」行程表

- ・派遣期間：平成26年8月19日(火)～23日(土)5日間、うち活動期間3日間
- ・宿泊場所：「南三陸ホテル観洋」〒986-0766 宮城県本吉郡南三陸町黒崎99-17 電話 0226(46)2442 FAX 0226(46)6200
- ・出発日：8月19日(火) 10:00 福岡空港第2ターミナル集合 10:30 出発式 / 11:15 発 SKY882便 (昼食は持参したうえ機内でのる)
⇒ 13:00 仙台空港着 / 13:30 貸切バス1台で出発
- ⇒ 15:00 プログラム系用の飲み物買い出し(道沿いのスパー等) ⇒ 16:00 上山八幡宮着 宮司さんのお祓い、お話し等 ⇒ 18:00 ホテル着
- ・帰福日：8月23日(土)：ホテル発 ⇒ 仙台空港着 / 15:45 発 SKY885便 ⇒ 17:50 福岡空港着
- ※佐藤先生：8月19日(火) 11:15 福岡発 ⇒ 13:00 仙台着 SKY882便 / 8月20日(水) 15:45 仙台発 ⇒ 17:50 福岡着 SKY885便
- ※小野寺学生部長：8月20日(水) 16:50 福岡発 ⇒ 18:35 仙台着 ANA797 / 8月23日(土) 15:45 仙台発 ⇒ 17:50 福岡着 SKY885便
- ・派遣人員：32人 内訳：学生32人(男15人、女17人)、引率者4人(教育職員2人、事務職員2人)

班	8/19(火)	8/20(水)	8/21(木)	8/22(金)	8/23(土)	ボランティアセンター等
A班 (島田)	<p>仙台空港 → 上山八幡宮 → ホテル観洋 A・B・C班：32名 引率者：3人 (佐藤隊長、三浦、江頭)</p>	<p>【体力系】 南三陸町 椿プロジェクト 清掃活動 学生：32人 (A・B・C班) 引率者：3人 (佐藤隊長、三浦、江頭) 計35人</p> <p>※当日の依頼状況により学生および引率は適宜分かれてグループを構成、移動する。</p> <p>※活動終了後、南三陸町さんさん商店街へ移動。</p>	<p>【体力系】 南三陸ボランティアセンター 学生：12人 引率者：2人 (小野寺学生部長、江頭) 計14人</p> <p>【プログラム系】 AM 仮設住宅訪問 (気仙沼市南最知) PM 面瀬小学校 なかよしハウス (気仙沼市) 学生：20人 引率者：1人 (三浦) 計21人 ※当日はグループにかかわらず、2つのグループに分かれて活動する。</p>	<p>【体力系】 南三陸ボランティアセンター 学生：9人 引率者：1人 (三浦) 計10人</p> <p>【体力系】 陸前高田市 NPO法人P@CT 学生12人 引率者：1人 (江頭) 計13人</p> <p>【体力系】 石巻市 NGO団体石巻応援団「おしか」 学生：11人 引率者：1人 (小野寺学生部長) 計12人</p>	<p>ホテル観洋 → 東北学院大学 → 仙台空港</p> <p>A・B・C班：32名 引率者：3人 (小野寺学生部長、三浦、江頭)</p> <p>全体的リーダー……神寄(島田、吉永、村田)</p>	<p>南三陸町災害VC TEL：0226-46-4088 担当：カツクラ氏 (受付) 8:30～9:00 (活動) 9:00～16:00</p> <p>気仙沼市社会福祉協議会VC TEL：0226-22-0722 FAX：0226-22-0732 地域支援班 担当：ヨシダ氏</p> <p>陸前高田市 NPO法人P@CT TEL：0192-47-4977 石巻市 NGO団体石巻応援団「おしか」 E-MAIL：ishinomaki.oshika@gmail.com</p>
B班 (吉永)						
C班 (村田)						

4. 参加者名簿

派遣人員：学生32名（男15名、女17名）

引率者4名（教員2名、事務職員2名）

引率者一覧	
所属	氏名
人文学部学生部委員、人文学部教授	佐藤 基治
学生部長、法学部教授	小野寺一浩
学生課員	三浦 和也
学生課員	江頭 学

A 班	
学部・学年	氏名
人文学部歴史学科1年	岸田 拓海
人文学部英語学科3年	櫻井香菜子 ○
法学部法律学科3年	島田 裕己 ◎
法学部法律学科2年	栗林 泰地
商学部商学科4年	古川愛央衣
商学部貿易学科3年	永富 優太
工学部電子情報工学科4年	古賀智恵理
工学部建築学科1年	林 美圭
薬学部薬学科1年	神崎 愛

B 班	
学部・学年	氏名
人文学部文化学科1年	佐藤ひなの
人文学部フランス語学科1年	園田 夕記
法学部法律学科3年	伊藤かおり
法学部経営法学科1年	篠原 光
経済学部経済学科3年	安部 皓仁
経済学部経済学科2年	神崎 暢久 ☆
商学部商学科3年	西山 咲
商学部貿易学科2年	吉永 由美 ◎
商学部貿易学科1年	野上 萌里
商学部第二部商学科2年	的場 健太
工学部電子情報工学科3年	田上隆太郎 ○
薬学部薬学科2年	水野 寧子

C 班	
学部・学年	氏名
法学部経営法学科3年	山城 麻生
経済学部経済学科1年	黒岩 愛佳
経済学部産業経済学科1年	坂本 晋也
商学部商学科3年	野中 慎也
商学部貿易学科1年	水野 美祐
商学部第二部商学科2年	龍造寺丈一郎
理学部応用数学科3年	井田 愛
理学部地球圏科学科4年	中村 敏之
工学部電気工学科2年	青柳 大地
工学部社会デザイン工学科3年	細井雄太郎 ○
工学部社会デザイン工学科2年	村田 希実 ◎

☆…全体リーダー
◎…グループリーダー
○…グループ副リーダー

2

募集から活動報告まで

東日本災害ボランティア第4次福岡大学派遣隊スケジュール

行事名	日程および内容
募集期間	期間：4月28日（月）～5月16日（金）
第1回事前研修	日時：5月26日（月）18：10～19：10 場所：学生部事務室棟2階会議室
第2回事前研修	日時：6月2日（月）18：10～19：10 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第3回事前研修	日時：6月9日（月）18：10～19：10 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第4回事前研修	日時：6月16日（月）18：10～19：10 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
ボランティア保険加入	期間：6月17日（火）～6月20日（金） 保険料：690円 納入方法：学生課窓口で保険料を納入
第5回事前研修	日時：6月23日（月）18：10～19：10 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第6回事前研修	日時：6月30日（月）18：10～19：10 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
参加費納入	期間：7月1日（火）～7月10日（木） 金額：20,000円 納入方法：学内の自動証明書発行機で納入し、 受領証を学生課窓口へ提出する。
第7回事前研修	日時：7月7日（月）18：10～19：10 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム

行 事 名	日程および内容
第 1 回破傷風予防接種実施	期間：7月7日（月）～9日（水） 場所：福岡大学病院
第 2 回破傷風予防接種実施	期間：8月5日（火）～7日（木） 場所：福岡大学病院
第 8 回事前研修	日時：7月14日（月）18:10～19:10 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第 9 回事前研修	日時：8月6日（水）10:00～12:00 場所：学生部2階会議室 A
結 団 式	日時：8月6日（水）13:00～13:30 場所：学生部2階会議室 A
第 10 回事前研修	日時：8月18日（月）10:00～12:00 場所：学生部2階会議室 A
ボランティア派遣期間	日程：8月19日（火）～23日（土） 場所：宮城県 南三陸町（活動拠点） 内容：1日目 南三陸町到着 ^{かみのやま} 上山八幡宮で安全祈願。 2日目 全班合同で南三陸町椿プロジェクトの清掃活動。 その後、南三陸町さんさん市場を見学。 3日目 A 班南三陸町でがれき撤去作業。 B 班、C 班合同気仙沼市で仮設住宅訪問、 学童保育。 4日目 A 班南三陸町で養殖カキの出荷作業。 B 班陸前高田市で遺品搜索作業。 C 班石巻市で漁業支援。 5日目 東北学院大学で報告会の後にグループワーク。 その後帰福。
ボランティア報告会	日程：12月8日（月） 場所：福岡大学中央図書館1階多目的ホール

3 被災地での活動内容

1. 活動1日目（8月19日）

上山八幡宮 訪問

8月19日（火）、宮城県に到着した福岡大学第4次派遣隊は、最初に南三陸町の上山八幡宮を訪問しました。この上山八幡宮は第1次福岡大学派遣隊から繋がりががあります。

上山八幡宮に到着して、今回の派遣隊の活動に関する安全を祈願しました。



上山八幡宮から見下ろす南三陸町



上山八幡宮の鳥居（津波がここまで到達した）



上山八幡宮で活動の安全祈願



被災地の1日も早い復興を願う

南三陸町防災対策庁舎 訪問

宮城県南三陸町上山八幡宮訪問の後、防災対策庁舎を訪れました。

震災発生後、皆屋上に避難をしましたが屋上をも上回る津波に襲われました。防災対策庁舎だけでも多くの命が犠牲になりました。



2. 活動2日目（8月20日）

上山八幡宮 訪問

前日に訪問した上山八幡宮に到着して、まず上山八幡宮の工藤真弓氏より紙芝居を交えて震災当時の様子などを読み聞かせていただきました。工藤真弓氏はこの紙芝居により震災の体験を伝えていているそうです。

第4次派遣隊一同、実際に津波の被害にあった方から初めて当時の様子をお聞きし、今回の活動への想いはより一層強いものとなりました。とても貴重なお話を聞かせていただいた上山八幡宮の方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



工藤真弓さんによる講話

南三陸町椿プロジェクト 清掃活動

工藤真弓氏による紙芝居を交えての震災当時の話を伺った後、工藤真弓氏が携わっている南三陸町椿プロジェクトの清掃ボランティアをさせていただいた。

このプロジェクトは、次に大地震が発生し、津波から避難する際に、椿が植えられた道を通って高台へ避難するというものである。椿は塩害に強く、万が一津波で潮水に浸かったとしても、立ち枯れることなくたくましく育つといった、復興のシンボルと位置づけているとおっしゃっていました。

夏場は椿周辺の雑草が生い茂るため、除草作業を行いました。兵庫県平岡中学校の生徒が植樹した椿の苗32本周辺の清掃活動に参加させていただきました。



南三陸町椿ものがたり椿の避難路（入口）



炎天下のなかでも強く育つ椿（中央）



避難路が分からないほど雑草が
生い茂っている



椿の周辺にある雑草がなくなった



椿の避難路の清掃活動（最初）



椿の避難路の清掃活動（終了後）



清掃活動終了後の集合写真



3. 活動3日目（8月21日）

宮城県南三陸町での農地復興作業

南三陸町のボランティアセンターにお世話になり、農業支援を行いました。耕作地から大きい石を取り除く作業をしたのですが、まだまだ農業機械が入れる状態にはなっていませんでした。

宮城県気仙沼市南最知仮設住宅での活動

仮設住宅では被災された方と交流会をし、本に挟むしおりなどを作り、ハンドマッサージを行い、交流を深めました。



宮城県気仙沼市面瀬小学校での学童支援

小学校では、子どもたちとサッカーやドッジボールなどをして遊びました。その後、プレイルームで活動を行いました。現地の方は私たちよりはるかに元気で、逆に現地の方から元気ももらいました。



4. 活動4日目（8月22日）

南三陸町長表敬訪問

8月22日、南三陸町長佐藤仁氏に表敬訪問をさせていただきました。

佐藤町長も実際に被災されたお一人で、震災時の状況を語ってくださいました。津波の様子を確認するため防災対策庁舎の屋上に上がったところ津波に流されかけたこと、その直後に雪が降り始め、偶然壊れなかったライターで火をおこし、みんなで集まって暖をとり一命を取り留めたことなど、壮絶な体験談を語ってくださいました。南三陸町では、また津波で大きな被害が出ないように住民の居住区を津波が来なかった高台に移し、もともとの居住区であったエリアには工場などを作ることで被害を少なくしようと考えているともおっしゃっていた。

佐藤町長は、遠くの地、福岡から多くのボランティアが来てくれていることに対して、この震災が結んだ縁の強さを感じておられるようだった。

今回、第1次派遣隊からの繋がりを通し、このような表敬訪問をさせていただき、貴重なお話をお聞きすることができた。改めて、活動することで出来る人と人の繋がり大切さを感じた。



宮城県南三陸町での漁業支援作業（A班）

この日も南三陸町のボランティアセンターにお世話になり、漁業支援を行った。現地では人手が少なく、出荷に非常に時間がかかってしまうことが課題である。



陸前高田市での遺留品等搜索活動（B班）

奇跡の一本松で有名な陸前高田市にあるボランティアセンターでお世話になった。この地域では盛り土で土地が埋まってしまう前に、遺留品を探すという作業を行った。



石巻市での漁業支援活動（C班）

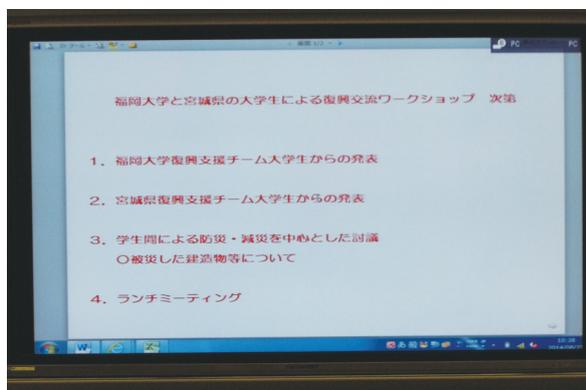
宮城県石巻市を中心に活動している学生復興支援団体「石巻応援団おしか」の活動に参加し、石巻市牡鹿半島にて漁業支援を行った。ホヤの養殖装置を作るお手伝いを行い、漁師の方々から風評被害や震災時の様子、養殖業を再開するまでの経緯などをお聞きした。



5. 活動5日目（8月23日）

宮城県東北学院大学での交流

仙台に向かい東北の学生と交流会を行いました。交流会では今後の福岡に戻ってから私たちに出来る活動についてお互いに意見を交換し合いました。現地の学生は震災後から活動を続けており、復興に携わっていました。今もなお爪痕が残る東北をしっかりと、福岡でも伝えていかなければなりません。



4 派遣隊員レポート



1. 学生レポート

【全体リーダー】 神寄 暢久（経済学部経済学科）

東北に初めて訪れたのは、去年の秋口だった。まだ暑い日差しが残る中で、風に吹かれる木々は青々とたくましくあった。一方で、まるで時間に取り残されたかのような震災跡が現地にはあった。「この震災後の東北をずっと見守り、寄り添いたい」私はそう思い、今年の春にも東北を訪れ、夏にも福岡大学第4次派遣隊として参加したのである。初めて団体の一員として東北に行くにあたり、「伝播すること」を目標として掲げた。風化が進む中で、まずは大学生として何が出来るのかを考えたときに、他者に繋いでいくことしか考えられなかった。

町に残る震災遺構を見たとき、隊員一同ただ呆然と立ち、何も言葉を発することは出来なかった。当時、想像を絶するような惨事が起こっていたことは誰も想像出来なかったであろう。防災対策庁舎では、福岡からはるばる自動車でこられた福岡大学卒業の方もいた。

仮設住宅・小学校訪問を通しての現地の方との交流では、あの未曾有の惨事を経験したのにも関わらず、私たちが現地の方の生き様に勇気づけられた。懸命に毎日を送ろうとする仮設住宅の方々、元気に大はしゃぎする小学生たちは私たちと同じ時間に生きているのである。

岩手県陸前高田市にお邪魔した際には、造成・高台移転のために以前住んでいた土地が土砂に沈んでいく光景を目の当たりにした。自分が住んでいた土地・もしかするとまだ家族が眠るかもしれない土地が土砂に埋まる姿を見る現地の方の複雑な気持ちは、決して私たちには想像できないであろう。

現地の大学生との交流では現地大学生のアグレッシブな考えが私たちのやる気を奮い立たせたのと同時に私たちの意識の低さを痛感させられた。

このように東北には今もなお、現地でしか学べないことが数多くある。学ぶ内容は人それぞれであるが、私は繋がりや大切さや学ぶことの大切さを学んだ。当時の震災の事実は消えることはない。その事実から学ぶことも決して忘れてはいけない。いかに私たちが寄り添い、向き合うかで風化は食い止めることが出来ると思う。今回の東日本災害ボランティア第4次派遣隊に参加したことで、学内に同志も増えた。今回のボランティア活動だけで終わるのではなく、継続した支援活動を行っていきたいと考えている者もいる。どこまでが復興なのか分からないが、伝播することを続けていくつもりである。

最後になったが、今回東日本災害ボランティア第4次派遣隊の関係者の方々に厚く御礼を申し上げたい。私のリーダーとしての経験不足により、ご迷惑をおかけすることが多々あったが、今回のボランティアの内容は最高のものとなった。今後とも、活動をしていく上で、温かく見守っていただきたい。

【A班リーダー】 島田 裕己（法学部法律学科）

私が東日本ボランティアに参加した理由は二つある。一つは、規模の大きなボランティア活動に参加しなかったから。もう一つは、東北に行き現地の様子を自分の目で確かめたかったからだ。私は過去にボランティアセンターを利用する等の規模の大きなボランティアに参加したことはなく、以前に行ったボランティア活動といえば高校時代にした学校付近の清掃活動くらいのもので、今回福大で東日本ボランティアの募集を行っていることを知り、参加しようと思った。またニュースで東日本大震災の被害は知ってはいたものの、テレビ画面越しの情報は現実味が薄く、実際に現地に行き、自分の目で東北の今を知りたいと思った。

私はA班のリーダーとして体力系の活動が主であったが、それらの活動を通じて思ったことは「一回の活動で行えることが少ない」ということだ。田んぼでの瓦礫撤去であれ、牡蠣の養殖の手伝いであれ、一日で東北に住む方々のためにできることはほんのわずかで、己の無力感を思い知らされた。けれどもその一方で現地の方や一緒にボランティアに参加している方からねぎらいの言葉をいただくと嬉しい気持ちで心が満たされ一日の労働の疲れがふっ飛び、明日からも頑張ろうと思えた。

応募動機でもある当初の私の参加目標は達成された。しかし、四泊五日のボランティア活動を通じて新たな気づきや目標が生まれた。大きく分けて二つあり、一つは津波の恐ろしさと宮城県南三陸町が復興にはほど遠いということ。もう一つは福岡に帰ってきてから絶対に行動を起こさなければならぬということだ。前者は現地を直接訪ね、津波の影響を受けた防災対策庁舎の凄惨な姿や津波に流され何もなくなった土地を目の当たりにし、町長さんに復旧工事の遅れている現状を伺って感じたことだ。後者は一日に行えるボランティア活動の限界を知ったこと、東北の現状を知ったことで、東北のためのボランティアを決して今回の四泊五日で終わらせてはならないと思ったからだ。

福岡に帰った後も、今も人手不足で苦しんでいる東北の現状をゼミやボランティアの報告会を通じてより多くの人々に知ってもらい、かつ、東北の方々に自分は何ができるのか悩み続け、考えたことを行動に移す、それがこれから私のやるべきことなのだと、改めて感じた。

【A班副リーダー】 櫻井 香菜子（人文学部英語学科）

2014年8月19日から23日までの5日間、第4次福岡大学派遣隊として、東北ボランティアに参加させていただきました。私が今回、この東北ボランティアに参加したいと思った大きな理由としては、一番に何か少しでも手助けできたら、という思いと、実際に現地に行って現在の状況を自分の目で見て、できるだけたくさんの人に伝えるということが大事だと思ったからです。

今回5日間、東北ボランティアに参加させていただいて、私が一番心に残っていることは、現地の方々の心の温かさです。最初は、私達のようなボランティアを受け入れてくれないのではないかと、今更行って遅いのではないかと、といった不安もありました。しかし、現地の方々は私が思っていたこととは反対に、出会った方々全員が笑顔で私達を迎えてくださいました。きっと、現地の方々は私達が考えられないくらい辛い思いをしていると思います。それなのに、見ず知らずの私達のことを快く受け入れて下さって、とても感銘を受けました。辛いときに笑顔でいる、ということはすごく難しいことだと思います。しかし現地の方々は、笑顔でいることで一歩ずつ、前に進んでいて、どんなことにも立ち向かおうとしているように思えました。

今回、たくさんの人々の笑顔を見ることができました。仮設住宅で生活している人達の優しい笑顔、子供達の無邪気で元気な笑顔、ボランティアセンターや商店街で一生懸命、働いている人々の明るい笑顔、現地の方々の心の強さ、温かさを深く感じました。現地の方々はもう十分に頑張っているのに、今は私達のようなボランティアが頑張る必要があると思います。「ボランティア」というと少し難しいイメージがあるかもしれませんが、しかし、「何か力になりたい」という思いがあるだけで、もう既にボランティアをしていると思います。何よりもまずは「気持ち」が大事だと思います。私も何かできることがあれば、積極的に行動したいと思います。

岸田 拓海（人文学部歴史学科）

2014年8月末、私は福岡大学災害ボランティア第4次派遣隊の一員として宮城県本吉郡南三陸町を訪れた。「震災から3年も経っていれば復興もほとんど終わっているだろう」そんな考えを持っていた私は今までにない衝撃を受けた。見渡す限り雑草だらけの街並み、防災庁舎跡などの無残に残った建物などを見て、本当にここは同じ日本なのかと思うほど、現地の現状は予想を遥かに超すものであった。

2011年3月11日の震災当日、中学校の卒業式を終え、ふとテレビを付けると信じられないぐらい大きな津波が東北に襲い掛かっていた。その時の驚きは未だに忘れられず、また津波の恐ろしさを痛感した。そんな思いがずっと残っていた時、福岡大学が東日本災害ボランティア派遣隊の団員を募集していたので被災地に行き、少しでも被災者の力になる活動を、そして自分自身の成長を胸に抱き現地へと向かった。

先にも話したように、南三陸町の復興はお世辞にも順調に進行しているとは言えず、完全な復興にはまだまだ時間がかかるだろう。しかし、多くの人々がこの状況を把握しておらず、復興が順調に進んでいると思い込んでいる。私もその考えを持った1人であった。「復興は順調だ。」そう思うってしまうことで人々は徐々にこの災害を忘れていきつつある。『風化』が知らず知らずと進んでしまっているのだ。では、この風化をどう改善していくか、それを考え行動することが、現地へ行った私たち32人が果たすべき使命だと思っている。1人では不可能なことでも、同じ意識を持った仲間と協力し合い行動すれば、きっと風化に立ち向かっていけると思う。

たとえそれが微力な活動だとしても、たとえ無謀だと思われる活動だとしても、私は一生懸命災害ボランティアに携わり続けたい。『風化』させないために…。

栗林 泰地（法学部法律学科）

東日本大震災が起きてから早くも3年半が経つなか、当初に比べると東日本大震災に関するニュースなどが少なくなり、世間では「現状はよくはわからないが時間も経ち復興予算も注ぎ込まれているのでそこそこ復興したのでは？」と思われ始めているように感じます。私自身も東北に行くまで同じような考えをもっており現地に行って被災地の現状を見て少しでも力になればぐらゐの安易な考えで第四次派遣隊に参加しました。しかし、東北ボランティア活動5日間の1日目に南三陸町の防災庁舎に行った際そのような考えが全く誤った認識であったと気付くことになりました。防災庁舎の周りは草原になっていて3年半前の状態から瓦礫だけ撤去されていました。近くでは盛土工事がされてい

るところもありましたが、とても復興が順調に進んでいると言えるような状況ではなく私はそのような光景を見てその時やっと被災地の復興のために少しでも力になりたいと真剣に考えました。

私はボランティア実働の中3日間を全て南三陸町で活動し3日目、4日目は南三陸ボランティアセンターにお世話になり、いくつかのグループと一緒にそれぞれ畑と漁港に行きました。畑の瓦礫撤去作業は適度な曇りで非常に作業しやすかったのですが、それでも6時間の作業で数メートルしか進まず、全ての畑の瓦礫を撤去するにはまだまだ時間もかかるし人手も足りてないと改めて感じました。漁港では漁師さんが本当に明るく出迎えてくださり雑談をしながら楽しい雰囲気の中作業することができました。しかし雑談の中に震災の話もあり、本当に苦勞してなんとか作業出来る状態にしたと聞いたとき、なんとも言えない気持ちになり、そして、現地の人の努力と力強さを感じました。また、この時一緒に作業した他のグループの方々と話をしたところ、多くの方が「東京から毎週末来ている」や「福岡から何度も来ている」と言われ、被災地に行き続けボランティア活動をやり続けていて、継続することの重要性を感じました。

被災地の復興にはまだまだ時間も支援も必要です。私たちが5日間でしたことは小さなことかもしれませんが、被災地で見たこと、聞いたこと、感じたことを福岡に帰って来て伝えることは私たちにしか出来ないことだと思います。伝えることによって少しでも風化を食い止め支援の手を増やすことが出来れば私たちが行ったことにも大きな意味があるのではないかと思います。また、継続することの重要性を感じたので今回限りで終わらせずこれからも活動していこうと思います。

古川 愛央衣 (商学部商学科)

今回宮城県での東日本大震災ボランティアに参加させていただき、とても多くのことを学びました。私はテレビなどのメディアでしか被災地を見たことがなかったので、実際に自分の目で見たとき、言葉にならない感情になったことを覚えています。あんなにも高いところまで津波が押し寄せてきていたことを実感して恐怖を感じました。また、私たちから見た町は道路も整備されていて、商店街もあり、活気があると思っていましたが、現地の方が生まれ育ち、見慣れた元の町の姿とは程遠いのだと感じたときにとっても悲しくなりました。しかし、現地の方はすでに前を向いて笑顔で生活をしていらして、私は自分が恵まれた環境にいるにも関わらず、小さなことで悩んだり弱音を吐いたりしている自分をとても恥ずかしく思いました。

実際に現地に行って活動をさせていただきながら、少しは役に立てているかなと感じた反面、自分の無力さを強く感じました。けれど3日目に仮設住宅に伺った際に、「ここに来て考え方が変わったとかじゃなくても、何かを少し感じただけで意味があるよ」と言ってくださった言葉が今でも忘れられません。今回の活動で出会い、お世話になったすべての方に感謝しています。ボランティアをさせていただきましたが、私の方がみなさんに元気と笑顔を頂きました。そして福岡大学第4次派遣隊のみんな、先生方、貴重な機会を与えてくださり本当にありがとうございました。一人ひとりのできることはごくわずかでも、それをみんなで継続していけば大きなものになると今回感じました。私はこれからも自分に出来る精一杯の事をしていきたいと思います。そして、今ある生活や幸せは当たり前ではないことを忘れずに、周りの人々を大切にしようと思いました。今回の経験や被災地の状況を、周りの人たち、同世代の人たち、そしてもっと多くの人に広げていけるような活動を見つけて、これからも取り組んでいきたいと思っています。

永富 優太（商学部貿易学科）

2011年3月11日、東日本大震災が発生してから約3年半が経過した。今回、私が第4次派遣隊に参加した理由は、当時、テレビや新聞で見た津波、地震の被害で沢山の家が流されたり、倒壊した状況を見て、その中で自分で何かできないのか、このような大きな災害に直面し、大きな傷を負った被災者の方々の心を少しでもケアしたい、元気を届けたいという想いを持って参加した。5日間、ABCの3つのグループに分かれて、体力作業と仮設住宅訪問のボランティアの作業を懸命に取り組んだ。私たちAグループは体力作業が殆どだった。ひたすら土を掘り返し、またその繰り返し。特に大きな瓦礫や物はない。周辺を見渡すと更地で何も無い。自然災害の恐ろしさを痛感しつつ、ひたすら作業に専念した。土を掘っている最中、今掘っている場所に人が住んでいたのか、と感じるとともに、辛く心が痛んだ。実際にこの被災現場に訪れない限りは、どれだけ恐ろしいことなのか、また、悲しいことなのか分からないと思う。この被災地の方々の想いを少しでも多くの人たちに知ってもらわないといけないし、そしてまた元の東北へと戻ってほしいと強く思った。東北を訪れて私が最も印象的だったのは、被災者の方々が元気で私たちへも笑顔で接してくれたことだった。こういった表現が適切かは分からないが、あれだけの状況になると自暴自棄になり、他人に心を閉ざしてもおかしいことではないと思う。私たちA班のテーマは、「笑顔」を被災者の方々に届けることだった。しかし、気づいてみれば、逆に自分が現地の方々から元気をもらっていた。やはり、現場で、自分の目で、手で、耳、または鼻で感じるのと、マスクを通して感じるのとでは、全く異なるということを感じ知らされた。それは、今後、通信手段がいくら発達しても変わることのないことだと思う。復興支援は、今回の作業で終わりではなく、継続が大事だ。日本の隅々からボランティアに参加してくれる人々、また、海外からも支援協力されており、日本は信頼されている国だ、素晴らしいことだと思う。これだけの人数と復興に対しての手助けをしたいという気持ちが合わさると大きな力になると思った。今回、この東日本災害ボランティアに参加し、その現状を知り得たということは、本当に貴重なものになった。どこまであの現状を伝え、何人の方を実際に行動させることが出来るか分からないが、まずとにかく「伝える」ということに尽力してみてもと思う。もちろん、また、機会さえあれば、現地でのボランティア活動に参加したい。とにかく、続けることが大事だ。継続は力なりである。

古賀 智恵理（工学部電子情報工学科）

「復興はあまり進んでいない」これが現地に行って最初の率直な感想です。私は今回で宮城県に行くのは2回目でした。1回目に現地に訪れたときと同じ場所でもボランティア活動をしましたが、風景はほとんど変わっていませんでした。少し道路の整備が進んでいたり、盛土の数が増えていたり、変化を感じたのはそれくらいです。木が様々な方向に倒れている、壊れた橋はそのまま、一見整備されているように見えても、よく見ると小さい瓦礫がたくさん転がっている、これらは移動中のバスの中で見たものです。私が主にしたボランティア活動は、上山八幡宮での清掃活動、仮設住宅の訪問、小学校の訪問、漁業支援です。毎年派遣隊がお世話になっている、上山八幡宮では清掃活動に加えて「椿物語プロジェクト」のお手伝いをさせていただきました。椿物語プロジェクトは、椿で避難路を作り、更には椿を産業にも繋げていこう、というプロジェクトで昨年からは企画されていたものです。この企画が実行に移っており、実際に植えられている椿を見て、まだまだ先は長いけれど確実に少しずつ前

へ進んでいることを実感しました。漁業支援では産業の活性化を目指し復興へ繋げていこうとしている現状も学びました。現地の漁師の方たちが集まって一つの場所で牡蠣の養殖などを行っていました。復興を進めるためには人手が必要です。しかし人手はまだまだ足りていません。これは今回のボランティア活動を通して改めて感じたことです。ボランティア活動を通して、私の活動は被災地の復旧・復興活動の中で本当にわずかなものであると思います。しかしそのわずかな力でも、笑顔になってくれる人はいます。そのことを大切に次へ繋げていきたいです。現地に行かなくても福岡から東北の人の力になれるような取り組みは様々であり、仮に福岡大学の学生全体でできる活動であれば大きな力に繋がります。福岡での取り組み、九州からでもできる取り組みをより具体的に考えていくこと、これが今できる活動であり、今後ずっと考えていくべき課題であると感じました。

林 美圭 (工学部建築学科)

私が東日本ボランティアに参加しようと思ったきっかけは、メディアと現実の違いを実感したい、少しでも被災された方々の力になりたいという想いからです。東北に滞在していた短い時間の中で私が被災者の方々のために役に立てたことはすごく少なくそれに比べて私が受け取ったものはすごく重く、大きいものでした。どこへいってもやさしく、明るく接していただき元気をもらったのは私のほうでした。また、私たちが泊まらせていただいたホテルからも見えていた海はきれいだと感じたと同時にこの海が約3年半前に大勢の東北の方々を襲ったのだと思うと単にきれいだと思うだけではいけません。ただ私ができることは終わっていません。これから自分が感じたことをどう広めていくのか、福岡からできることは何なのかを考え、実行していくこともボランティアであると思います。

テレビやネットで被災状況を見るのと実際に被災地に行って被災された方々の意見を聞くのでは本当に違いました。防災庁舎など震災後残されている建物を見てみるとここまで海の水が来たという地点は見上げないと見えないほど高かったです。ボランティア3日目に訪問した仮設住宅ではわかめの食べ比べをさせていただき、宮城の有名な海産物や漁の現状について知ることができました。しかし特に心に残ったのは仮設住宅の方のうちの一人の方が聞いたといわれていた話で、津波に流されているときに頭の上を車が通ったという話でした。この話をきいて、私は改めて津波の怖さを感じました。

東北学院大学との交流ではディスカッションをして具体的に、SNSを利用することや防災マップを作るなどが決まりました。私は何も意見を出すことができず、自分の意識の低さを痛感しました。また、地元の学生さんたちは夏ボラを行うなど復興に対する想いの大きさを感じ、このままではだめなのだと再確認しました。

たったの5日間だったけれど、行く前と行った後ではボランティアに対する考え方や東日本大震災に対する考え方が大きく変わったボランティアでした。ボランティアに終わりはありません。積極的に東北やボランティアの現状を広めていきたいと思います。

神崎 愛 (薬学部薬学科)

東日本大震災から3年が過ぎ、いまの被災地の状況を知りたい、そして少しでも自分にできる支援がしたい、という思いで私はこの第4次派遣隊に参加しました。

初日に、南三陸町にある防災対策庁舎を訪れました。震災当時から幾度もテレビや写真では目にしていましたが、建物がある位置からは海は見え、ここまで津波が来たということが信じられませんでした。骨組みだけが残っているのがその被害の大きさを物語っていました。周囲はほとんど更地で草が生い茂っていましたが、家の土台が残されていました。付近には、茶碗の欠片や携帯電話など、あの日が来るまでは確かにそこに人々の生活があったという証がありました。命を奪われた人々、生き残ったけれどもここを去らなければならなかった人々の気持ちを想うととても胸が痛みました。

3日目には南三陸町ボランティアセンターを訪れ、農業支援の活動に参加しました。ピッケルとバケツを手に、農地化の妨げとなっている大きな石を土の中から掘り出すという作業を行いました。前日までに他団体が作業を終えた箇所からスタートして、この日進んだ作業は距離にしてわずか3mでした。まだまだ先は長く、ボランティア活動を継続する大切さを身に染みて感じました。

ほかにも、上山八幡宮での清掃活動や、志津川地区での漁業支援活動、東北学院大学でのワークショップなど数々の活動に参加することができ、活動を通して、各地からボランティアに参加している人々に出会うことができました。特に、漁業支援とともに活動した山形の方からは3年間で15回以上ボランティア活動に参加しているとうかがい、とても刺激を受けました。この夏は、北部九州で豪雨被害があったり、私たちが宮城に到着したちょうどその日には広島で土砂災害があったりと、西日本では立て続けに災害が起きました。5日間のどの活動の時にも、東北の人々は西日本のことをとても心配してくださったのが印象的で、今後は、今回の経験を伝え、活動を継続していくことに加え、近隣地域でのボランティアにも長期的に携わっていきたく強く感じました。これからも東北の人々のことを忘れず、日々の生活を大切に過ごしていきたいと思います。

【B班リーダー】 吉永 由美（商学部貿易学科）

私が今回4次派遣隊として希望した理由は、今までインターアクトやロータリーを通してボランティア活動してきた経験を活かし、少しでも被災地復興の力になりたいと思ったからです。しかし実際に現地に行ったことがなく今回この機会を知り、自分の目で今の東北を知りたい、力になりたいと思い応募しました。

現地ではメディアでは伝えきれていない姿、想像とは違う現状を目の当たりにしました。さら地が続く何十台ものトラックが行き通っていて、屋根のないガソリンスタンドや簡易施設がたくさんありました。色のない景色が続く中、所々に花束や千羽鶴が捧げられてあり、辺りには瓦礫がまだあちこちに残っていました。この景色を見て3年が経とうとしている今でも復興は進んでないと実感しました。津波の跡が残っていた結婚式場では15.5Mが思っていた以上に高く、ここまで波の高さがあったと思うと足がすくみました。

第一次派遣隊から繋がりのある上山八幡宮での宮司さんの話の中で、ボランティアの方がおっしゃった“耐えてください、私たちががんばります”という言葉聞いて「がんばる」という言葉が、時にはこんなにも意味が違うのだと感じ、相手の気持ちになって発言しなければならないと改めて学びました。また、仮設住宅訪問では津波の中を経験した友人の話をしてくださって、話を聞きながら私たちは何と返したらいいかわからず、ただ衝撃的な事実にならずに済むことしか出来ませんでした。思い出したくない過去の津波での経験を話して下さった方々の心境を思うととても胸が苦しくなりました。

風化しつつある東日本大震災の今を「伝えること」これが私たちの課題です。今回初めて東北に行って現状を知り、復興の大変さ、生活を見直すきっかけにもなり、得ることがたくさんありました。今回経験したことを活かし、今後も私たちにできるボランティア活動を継続して復興に少しでも力になれるよう努力してきたいです。そして少しでも多くの人にもっと東北のことについて知ってもらい、支援していただきたいと思います。

【B班副リーダー】 田上 隆太郎（工学部電子情報工学科）

まず、東日本災害ボランティアに第4次福岡大学派遣隊として参加できたことは、本当に誇りに思いますし、このような貴重な経験ができたことをすべての方々に感謝します。自分たちの掲げたテーマ「繋」のとおり、つながりというものがこの活動を通して改めて大切なことだと感じられました。これからのこの気持ちを大事にしていきたいと思います。

私たちが東北に来て最初に訪れたのが第1次派遣隊のころから親交のある上山八幡宮でした。この場所は高台に位置するのですが、鳥居の近くまで津波が到達したことを記す印を見つけました。それはとても衝撃的で、こんなところまで津波が来たのかと思うと、震災の恐ろしさを実感させられました。また、そこからあたりを見まわしてみると、次の津波に備え、土地のかさ上げが始まっているところもありました。しかし、正直な印象としては、全体的にまだまだ復興が進んでいないなあというのが本音でした。ただ、だからこそ自分たちがここの復興に対してやれることがまだまだたくさんあると思ひ、この活動に対する責任を強く感じました。

それから、近くの防災庁舎などを見て回った際には、自分がテレビなどのメディアを通じてみていたよりも、現実を目の前にするとその驚きは想像以上のものでした。津波がすべてを飲み込み、跡形もなくなってしまう様子をここに住んでいた人たちは、どんな気持ちで見ていたのだろうと考えると、

とても心が苦しくなりました。

上山八幡宮では、紙芝居も見せてもらいましたが、その内容は震災から今までのエピソードが描かれており、とても考えさせられるものばかりでした。その中で一番印象に残っているのが、紙芝居の最後が「はじまり、はじまり」で終わったことです。この紙芝居には続きがあり、まだまだこれからということだと思ったし、この復興への物語が終わらないように、自分たちも支えていきたいと思いました。

そして、この活動を通して特に感じたことが、人から感謝されることのありがたみでした。上山八幡宮の掃除や仮設住宅、小学校への訪問、陸前高田でのボランティア、どれをとっても最後にはみんな笑顔で「ありがとう」という言葉をかけてもらいました。自分たちのやった活動は迷惑をかけた部分があったかもしれませんが、ただ、このように感謝の言葉を聞くと自分と関わりを持った皆さんの力に少しでもなれたのかなと思ったし、このボランティアをやってよかったと、大きなやりがいを感じることができました。

最後に、この東日本災害ボランティアの五日間だけで、この活動を終わらせてはいけません。この経験を伝えていく、周りに発信していくことが、これからの自分たちの役割です。年月も経過してきて風化していく中で、現地に行ったからこそ分かることが多く、自分たちにしか伝えられないことがたくさんあると感じました。自分から率先して行動することがボランティアをやっていく上で重要なことで、ボランティアをやって終わりではなく、これからもつながりを持ってこの活動を継続していきたいです。

佐藤 ひなの（人文学部文化学科）

私はボランティアをしたことがなかったのですが、3.11以来自分にできることはないだろうか、被災地のほうでは自分たちの年代も復興に向かって頑張っているのに自分も頑張らないでどうするんだと思い、この東日本災害ボランティアに参加させていただきました。

初めて被災地を訪れたのですが、想像していたのとはるかに違うものでした。周りを見渡すと何もない更地に行き交うトラック、防災対策庁舎などの骨組みだけが残っている建物などでした。以前そこに人が住んでいたんだと考えると胸がいたくなり考えさせるものがありました。それと同時に被災された方々のために東北のために少しでも役に立てるように3日間の活動を頑張ろうと思いました。

最初の活動は椿の道の草刈りをさせていただきました。ここは津波が来た時のための避難経路にしていて、椿は塩害に強く津波がきても丈夫なため植えているとのことでした。

草刈りのときに様々な話を聞かせてもらったのですが、1番印象に残っているのは、「東北頑張れとよく言われるが頑張るのは東北のほうではない。頑張るのは自分たちのようなボランティアであり、東北の皆は耐えるんだ」という言葉でした。その言葉を聞いて今日の活動は少しでも役に立てたのかなと少し不安になる部分もありました。

次の日は仮設住宅訪問と面瀬小学校に行きました。仮設住宅訪問ではメディアでは聞けないような震災当時の話をしてくださったり、自分自身も津波の中を逃げるために泳いだなどと実際に現地に行ってみないとわからないような様々な話をさせていただきました。他にもいろいろ話を聞いていると被災者の方々は前向きに生きていて、見習わなければならない部分もたくさんありました。

面瀬小学校では交流会などをさせていただきました。私がしゃべった女の子の中で「おばあちゃん

津波で亡くなったんだ」という言葉を聞いたとき何も言い返すことができなくて頷くことしかできませんでした。震災で心が傷ついている子どもはたくさんいるし、今以上の心のケアも必要なのかなと思いました。

最後の活動は、山になっている石が含まれている砂をふるいにかけてガラスの破片などを分別する作業でした。まだ行方不明の方もいらっしゃるので髪の毛などがでてくる可能性があるからその時はDNA鑑定に出すと言われ、震災から4年もたっているのにこのような作業をし、復旧もまだまだ時間がかかるなと思いました。

私がこの東日本災害ボランティアに参加して思ったことは、自分が現地で見えたもの聞いたもの感じたものを発信し続けなければならないし、風化させないこと、相手のニーズを考えること、そして実際に現地に足を運ぶことだと思いました。

この活動ですべて終わりではないし、ここからが始まりであって一度きりのものにしたくないし、これからも継続して東北にボランティアに行かせていただくのが自分の使命だと思いました。

園田 夕記（人文学部フランス語学科）

私が派遣隊に参加した理由は、震災の風化が進んで復興が遅れる中で、自分も何か力になれるのではと思ったからです。現地の復旧作業をしたいというのもありましたが、一番大きかったのは、震災に遭った方々の心に寄り添いたいという気持ちでした。私が土地の整備や瓦礫の撤去で進められる量は僅かだろうけれど、その協力によって、東北の方々の心を支える事ができるのではと考えていました。

東北に到着した日には、防災対策庁舎を訪れました。震災から3年が過ぎた今でも、庁舎の前には花や折鶴が供えられていました。庁舎の大きく歪んだ鉄骨を見て、私は初めて震災を意識しました。あの日津波に襲われた方々はどれ程恐ろしい思いをされたのかと考えさせられました。庁舎の取り壊しの問題についても、今まで私は壊しても良いと思っていたけど、間近で庁舎を見て初めて考える事も多くありました。確かに、庁舎は見ているだけで胸が苦しくなるし、亡くなられた方や、そのご家族の事を思うと、残してほしい物ではありません。しかし、大震災を経験していない人が庁舎を訪れる事によって防災意識を高め、同じような悲劇を繰り返さないようになるのであれば、残す意味があるのかなと思いました。

また、4日目にお世話になったP@CTの活動では、大震災を経験した方々と、そうでない私達の大きな意識の違いを感じました。ここでの活動は、陸前高田市での遺留品捜査でした。瓦礫の混じった土をふるいにかけて水で洗い、髪の毛や身分証等が無いかを探して分別するという、とても地道な作業でした。私達が瓦礫と呼んでいる物は、そこで生活していた方々の家であり、家具であり、思い出の詰まった品々だという事に気が付きました。今までは、人手が足りないから“瓦礫撤去”も進まないのだと思っていました。しかしそうではなくて、その山の中から、亡くなった家族の持ち物が出てくる可能性・残された家族の思いを考えて、搜索しながら作業を進めているということが分かりました。

最終日には、東北学院大学の神さんと、尚綱大学の及川さんとの交流会がありました。防災・減災をテーマに意見を交換する中で、一番心に刺さったのは“被災”という言葉の使い方でした。私は今まで何気なく“被災者”や“被災地”と言っていたので、この言葉で誰かを傷つけてしまったかもしれないと反省しました。5日間を通して、落ち込んでばかりではない、立ち上がり前進する東北の皆さんの姿を沢山見てきました。神さんが“被災”という言葉を使わないで欲しいと言った時、上山八幡宮の工藤さん

が「私達はもう、被災者ではないのだから」と話されていたのを思い出しました。

それから、5日間の活動の移動中に、東北の地名と一緒に「頑張れ」と書かれた看板を多く見かけました。それを見て、震災があった地域だけに、どれ程頑張らせてしまったのだろうと申し訳ない気持ちになりました。本当に頑張るべきなのは、私達の方です。また津波が来るかもしれない場所で作業を続けているのも、大震災を経験した方達です。九州のような遠い地域で、現地の事を忘れないのも大切ですが、それでは現実的な解決にならないと気付かされました。まずは現地のためになるアクションを起こす事が大切だと強く思いました。

この東北での経験は、災害について考えるきっかけとなりました。東北ボランティアはこれで終わりではなく、始まりだと考えています。現地に何度も行く事が出来なくても、学生の私達に出来る事は沢山あるはずで、現地のニーズに合う物は何なのか、震災を風化させないためにはどうすればいいのかを見つけるのが今後の課題だと思います。震災があった地域には、まだ手つかずの場所もあります。継続して支援することが復興への近道です。これからの課題は多いですが、今度は九州に住む私が頑張りたいです。

最後に、お世話になった東北の方々、全力でサポートしてくださった学生課の皆さん、意見をぶつけながら支えあってきた派遣隊の皆、本当にありがとうございました。

伊藤 かわり (法学部法律学科)

東日本大震災から3年後の2014年8月19日～23日の間、第4次福岡大学派遣隊として、宮城県を訪れボランティア活動をさせて頂きました。

私が今回の活動に参加した理由は、東日本大震災が起きた年は高校生だったため、街頭で募金活動くらいしか出来なかったのが、時間と金銭的にも余裕が出る大学生のときにぜひ参加したいと思ったからです。

また、地域の清掃活動や子供達と触れあう機会があった際にボランティア活動をされていらっしゃる方々からお話を聞いて、私にも出来ることをやり続けたいと思ったからです。

活動を通して、テレビや本で見るものではなく自分の目で震災の恐ろしさを感じ・知ることができ、それまであまり考えて過ごしてこなかった地震、防災について改めて考えさせられました。

被災地に瓦礫等は残っておらず、綺麗に整備されていましたが、更地になっていて震災前に人が住んでいたとは思えないほど寂しいものでした。

仮設住宅にお伺いさせて頂いた際に、被災された方々からの温かいお言葉や笑顔を頂いて、私たちがボランティア活動に来ているのに元気を貰いました。

この活動に参加する前は、被災された方々を少しでも笑顔に出来たらいいなと思い参加しました。

しかし決して後ろ向きではなく、前向きに一步一步進んでいこうとしているのを感じて、今後も継続して繋がっている関係を築きたいと思いました。家族・友人・先生等、関わりがあるすべての方々に活動を通して感じたこと・被災地の現状など、些細なことでも良いので伝え続けることが大切だと思いました。

また、福岡は被災地から離れていることや、大規模な地震・津波を受けたことがないこと、震災から3年という長い月日が経過していることから、地震・防災に関する意識がかなり薄いと思うので大学の中をはじめ、大学の外でも呼びかけをすることが大切だと思います。

最後に、このような貴重な経験が出来たのは沢山の方々のご協力があったからだと思っています。関わって下さったすべての方々に心よりお礼を申し上げます。

篠原 光 (法学部経営法学科)

今回、自分が第4次福岡大学派遣隊に参加した理由は、少しでも人の役に立つことがしたい、自主性が問われるこの大学生活のうちに、様々なことに積極的に参加したいと思っていたからです。

3月11日に東日本大震災が起き、その爪痕は今でも深く残っています。しかし、最近では少しずつ復興が進んでおり、新しい建物が建っている。という情報がニュースやメディアの中では流れています。自分もテレビを見て「3、4年も経てば元にもどっていくものなんだ」と思っていました。派遣隊として被災地に訪れた時、自分がテレビで見ていた情報、景色とは相反するものばかりで、メディアに騙されていたことに気がきました。確かに復興が進んでいる地域はあるものの、そのごく一部を取り上げていただけで、「事実と真実の違い」を感じました。人が住んでいた面影はなく、あたり一面が埋め立て地で、自分は「無」を感じました。当たり前だった日常を急に奪われ、家族や知り合いが災害によって亡くなる。そんなことを考えただけで、とても胸が苦しくなりました。

5日間の活動をしてきて、南三陸、気仙沼、陸前高田と様々な場所にいきましたが、最も復興が進んでいないと感じたのは陸前高田市です。ガレキが積み上げられ、大型トラックが何台も移動している。そこはまだ手が付けられていない場所というのがハッキリと分かるものでした。陸前高田サポートセンターへ行き、遺留品搜索、ガラスや陶器のかげら等の分別をしました。大勢の人がいたにも関わらず、一つのガレキの山を一日で平らにすることができないくらい津波の威力、影響はすさまじいものだったのだと感じました。気仙沼市では仮設住宅に行きましたが、正直自分は行きたくありませんでした。被災された方々が、福岡からやってきた学生ボランティア団体を受け入れてくれるのだろうか、うっとうしいと思われまいだろうか、不安しかなかったからです。しかし、仮設住宅の方々はまるで孫のように温かくもてなしてくれ、食べ物までご馳走になりました。会話が弾んで緊張感がほどけてきた時に、ある方が津波の話を出して、涙を流していました。明るく振舞ってくれていたのかもしれませんが、心の底には傷があるということに気が付きました。直感で自分たちにできることは、若い力、元気を与えることだと感じました。そこで接し方を変えてみると、相手方にも笑顔が増え、楽しい時間を過ごすことができました。別れがすごく悲しく、最後まで手を振っていたあの景色は一生忘れないと思います。

この東北ボランティア活動を終えて感じたことは、一つは、どんなことでも自分で現地に足を運んでみなければ真実は分からないということです。二つ目は、復興はおろか復旧までも進んでいないということです。自分が見て来たものをSNS等を使って、周りに現状を拡散していくことが必要だと強く感じました。最後に、人と人との繋がり、出会いは大切だということです。派遣隊のメンバー全員と仲良くなれたし、東北で出会った人とも繋がることができました。出会いに感謝し、この経験は人生の中で必ず活かされると思います。

西山 咲 (商学部商学科)

今回、福岡大学第4次派遣隊として、宮城・仙台に行きました。私の参加理由は、昨年の福岡大学で行われた、近隣ボランティアに参加して、そこで自然災害の怖さと人間の無力さを実感し、それを感じた自分をもっと何かできることはないか、しなければならぬことはまだあるのではないのかと思ったことです。また、東日本大震災から4年目という月日がたっていることが、私の中では大きかったからです。なぜ4年目が大きかったのかというと、被災地のニーズが大きく変わる年でもあるし、私自身、丸3年たっていてどこか他人事になって忘れかけている部分があったからです。

東北に行くまでは、週1回の研修会で現地のニーズを調べ、必要とされているもの、活動をどのように進めていくかを全員で考えて準備をしていきました。1～3年目の、がれき撤去などといったハード事業と違い、4年目は、現地の人への心のケア（子供をはじめとする）や、これからまた復興していくために、漁業支援などというように、ニーズが変わっていったのがわかりました。今回は30人強の人数で去年に比べて少なかった分、より団結してたくさんの意見を全員で交換し、より良いものができました。

東北に行ってから、衝撃だらけでした。初日は、防災庁舎といった被災した建物や町をまわって、通るたびに何も感情が出てこないというか言葉が出てこなくて、ショックでした。街並みも、震災直後のようなガレキだらけの街並みではなく、また同じような津波がきても大丈夫なように、土地のかさ上げをしていて、ガレキもなく、ただただトラックが砂を運び続け砂が高く積み上げられているという状況でした。だから、どれだけ被害がすごかったのか、ここには家があったのに…といったことは、正直、直接感じ取ることはできず、写真や現地の方々から教えていただくことから想像していくしかできませんでした。2日目からは、各班に分かれて行動したり、小学校・仮設住宅を訪問し、一緒にお茶を飲んで話を楽しんだり、一緒に遊んだりと活動していきました。私の中で一番印象に残っている活動は、砂の山をスコップで削っていき、その砂をふるいにかけて遺留品を探していくというものです。髪の毛1本も遺留品となり、被災された方からするとすごく大切なものであるというのが、非常に印象的でした。

この活動を通して、やはりメディアだけで得る震災後の状況と、実際に現地に行き、自分の目で見て触れるものとは全く違うということを感じました。今回は5日間という限られた日程で、いろんな活動に触れていったので、1つの活動に対して深くかかわることはできなかったけれど、確実に現地でのニーズは変わっていったというのが実感できたし、逆にまだこの活動に人が必要とされているのだという気付きもありました。

そして、これから私たちがしていくことは、周りの人たちに私が東北に行って感じたこと、知ったことを伝えていくことではないかと思います。

野上 萌里 (商学部貿易学科)

東北大震災が発生してから約三年半経った現在、私達の中で風化されつつあります。

その様な現状がある中で、「復興がどこまで進んでいるのか自らの目で確かめたい」、

「少しでも役に立ちたい」、そして、「伝えられる側」でなく、「伝える側」になりたいという思いから参加を決意しました。

今回、被災地である宮城県本吉郡南三陸町へ行きました。三年以上経っているのだから大分復興が

進んでるだろう。そう思い現地へ向かいました。

実際行って見た現地。それは自分が想像していたものとまるで違いました。

辺りには、積み上げられた砂の山、行き交う多くのトラック、壊れたままの橋、建物はほとんどありませんでした。更に、以前建物があった周辺を歩くと、お皿の破片や割れた携帯電話など、当時の生活を思い出させるようなものが現在でも残っていました。初めてみた現地に胸が痛みました。

そして、私は五日間の中で強く印象を受けたものがあります。それは、“何もないから、何かつくれる”というポスターです。その前向きなフレーズに心を惹かれました。

このポスターからも分かる様に、現地の方は前向きにお互い支えあって生活していました。「一人では出来ないことも皆でやれば出来る！皆ですれば出来る！」

笑顔で話して下さった仮設住宅の方の言葉が印象的でした。現地の方々は本当に明るく温かい方ばかりで逆にパワーを貰った気がします。

現在、現地では多くの人が他の場所へと移り、人が減少してしまっています。

しかし中には、ここでしか学べないことがあるという思いから現地に残っている方や、今まで長く住んでいて離れられないという方もいらっしゃいました。その方々のためにも、いち早く復興をしなければならぬと思いました。

私達の間でよく耳にする“復興”という言葉。考えていたより遙かに難しく時間のかかることであることを活動を通して感じました。私が今出来ることは、より多くの人に伝えていくこと、継続して活動していくことです。私に出来ることは小さなことです。しかし、その小さなことの積み重ねが大切だと現地に行き実感することが出来ました。

的場 健太（商学部第二部商学科）

私たちはこれからも現地の現状を少しでも多くの人に伝えていくこと、これからも継続して現地に目を向ける必要があります。そのためには福大の、福岡の、全国の人の力が必要です。

私は実際に現地に行って「現に復興は進んでいるのか」、「様々な場所からの募金は、現地の方々のために使われているという実感はあるのか」、「現時点で何か必要なものはあるのか」を知る必要があると思い、参加しました。また、風化が進む中でメディアを通してではなく、自分の目で見たいと思いました。あの震災から約3年経った今、復興の手は行き届いているはずだ、とばかり思っていたが、それは全く間違いだということを感じました。ボランティアへ行きたくても行けない人が多い中、私たち第四次派遣隊は貴重な体験をさせていただきました。この5日間得たものは確実に自分の中で大きな影響を与えています。

南三陸町に到着し、骨組みだけのボロボロになった防災対策庁舎を見た途端、何とも言えない気持ちになり、呆然としてしまいました。ここで何人の方が亡くなったかと思うと胸が苦しくなりました。同時に気持ちが切り替わり、この5日間の活動が終わった時に悔いの残らないようにしようと改めて強く思いました。上山八幡宮での宮司の工藤さんの紙芝居で津波の恐ろしさを初めて知りました。その内容は津波の海水で木々は枯れてしまうが、樁だけは根が深いために枯れなかったから、樁を植えて避難する経路をつくろうというものでした。普通の紙芝居では「おしまいおしまい」だが、工藤さんの紙芝居のラストは「はじまりはじまり」だったことにとっても感銘を受けて、樁の苗を植えてからが現地や私たちボランティアの「はじまり」だということを感じさせられました。工藤さん夫妻や息子

のゆうすけ君はとても前向きで、逆に私たちが元気をもらってしまいました。震災のため、子育て世代がほぼ町から出て行ってしまっているという問題もお話してくださいました。でも、工藤さんはこの震災を忘れないために近くの小学校に通わせているそうです。私たちが知らない問題はまだ山ほどあると痛感しました。南三陸町の当時の写真を見て、ガレキや車などが所狭しに町を牛耳っていました。その写真を見て、今はガレキなどはほほない状態だが、復興は進んでいるのか進んでいないのか自分の中で分からなくなりました。そこで何をもって「復興」とするのか、が重要だと考えました。もしガレキ撤去などの物的な復興は進んだとしても、現地の方々の心が復興できていないと意味がありません。もちろん物的にも進んでいません。街は更地のままで時間だけが過ぎていきます。住民と市と国が連携しないと復興は進みません。しかし、その仲介者がいないのが現状です。

さんさん商店街という、南三陸町にかつてお店を出していた方々がプレハブでお店をしている商店街にも訪れました。そこで乾物屋をやっている方にお話を聞きました。その方は当時自宅が海沿いにあったらしく、何か災害が起きれば貴重品など何も取りに帰らずに避難しようと決めていたそうです。そのおかげで助かったが、他の家に取りに帰った友人などは亡くなってしまったという話を聞いて、あの被害がどれほどの影響だったのかを知ることができました。この話を涙ぐみながら話していただきました。思い出したくもないつらい経験なのに話していただいて、申し訳なく思いました。この5日間で最も後悔したことは4日目の陸前高田市で遺留品捜査の活動をしているときに、遺留品がまだ残っている土の山に乗って写真を撮ろうとしたことです。あれはかなり軽率な行動で、今でも反省しています。陸前高田市は当時もニュースで大きく取り上げられているイメージがあり、行ってみたい土地でもありました。実際は更地ばかりでずっとダンプカーやトラックが行き来している状態でした。南三陸町よりも進んでいない印象を受けました。一緒に活動した様々な地からの大学生と交流もできました。東北学院大学の学生の方にもお話を伺いました。この活動はその方から始まった活動でした。母校がその活動場所から見えるところがあったと言って、その場所を指差してくれましたがそこには何もなくて言葉に詰まりました。でもその方は笑顔で話してくれました。いつかこの町にもどりたいという願いから、着実に活動を進めています。完璧に元通りになるのはできないかもしれませんが、自分の住んでいた町がいつまでもあの状態では悲しいです。私はその願いに少しでも力になりたいです。少しずつですが、ほんの少しでもいいから復興が進むことを願っています。

最後になりますが、ボランティアは「行ってみたい」だけではできません。様々な手続きから、多くの方々の協力のもと私たちは初めて活動ができます。どうか「行きたい」と思っている人は実際に現地を訪れて、自分の目で見てほしいです。そのためには私たちは全力でバックアップします。より多くの方が現地のことをいつまでも忘れないよう、望んでいます。

「懐かしい未来へ」。南三陸町へ行く道中でこの大きな文字を見つけました。誰もがそれを心から願っています。

水野 寧子（薬学部薬学科）

東北へ初めて行き、メディアを通して見るのと実際に自分で見るもののギャップの大きさに衝撃を受けた。1日目によく報道されていた防災庁舎や結婚式場を訪れた。実際に見たとき自分は甘かったと思った。事前研修など自分なりに準備はしてきたつもりだったがそれは中途半端であったと感じ、生半可な気持ちとやる気ではボランティアをする資格がないと思った。そこから本当の気持ちのスイッ

チが入ったと思う。

2日目に訪れた上山八幡宮のおじいさんの話がとても心に残った。震災後、よく「がんばれ日本」とか「がんばろう宮城」という言葉を見かけたけど何を頑張ればいいのか、何をしたいのかわからなかった。雑誌を読んでいるとある人が「東北の人は耐えてください。私たちが頑張りますから」と書いていた。その言葉に大変救われたとおっしゃっていた。その話を聞いて私は「がんばろう日本」という言葉に違和感を覚えなかったことから他人事、第三者として被災地を考えていたのではないかと気づかされた。普段何気なく使っている「がんばれ」だがその意味を考えさせられた。

行く前までは元気をあげようと意気込んでいたが、5日間振り返ると現地の人に毎日元気をもらってばかりであった。本当にみなさんはポジティブで見習わなければならないと感じた。その中でもふと本音を漏らしているのを聞くと、目に見えない復興つまり心の面での復興も必要であると思った。福岡に帰ってきてから私たちができることは東北で感じ、見てきたことを伝えることである。震災を風化させては絶対にいけない。私は現地でボランティアをして終わりではなく、これから伝えていくことが「はじまり」だと思っている。

安部 皓仁（経済学部経済学科）

私は、津波で建物が次々と壊され、人も流されていく衝撃的な映像をニュースで見たことを今でも覚えています。そんな被災された方々のために、復旧・復興活動に協力し、役に立ちたいと思い、今回このボランティアに参加させていただきました。

私が最初に仙台空港に着いたときは、津波が来たことを感じさせないようしっかりとした建物や道路が見えましたが、外に出てみると、空港の壁の4～5メートル高い場所に浸水到達場所と書かれていて、生でその高さに津波が来たことを示すその文字は私には衝撃でした。そんな高さに津波が押し寄せてくる瞬間の絶望感は、想像を絶するものだったろうなと思ったのが、現地に行ってみて初めて考えさせられた光景でした。

また、現地での活動で復興への道のりは長いと思いましたが、何よりも被災地の方々がすごく温かく接してくれたことが、強く印象に残っています。被災された方々には様々な思いがあるはずです。私のような何の被災も経験していない者が、被災者の気持ちなど分かるはずがないと言われても仕方がないくらいの気持ちで仮設住宅と小学校に訪問したのですが、そこでは全ての方々が笑顔で私たちとの時間を過ごしていました。自分は経験したことの無い地震や津波、そこには家族を失った人もいます。そんな大きな悲しみを抱えて、乗り越えて今を生きているお年寄りの方や小さい小学生の笑顔を見て、強い方たちだと心から思いました。それと同時に、すごく元気をもらえました。

今回ボランティアを終えて、私は復興にはまだまだ人手が必要であると感じました。ボランティアを行っただけで終わらせるのではなく、自分たちがより多くの方に自分の見た被災地の現状など、感じたことを伝えていくことが大事だと思います。そうしてたくさんの方に関心を持ってもらい、行動に移してもらうことが、風化を防ぐという意味でも、復興への近道です。今回のボランティアでの日々は一生忘れることはないし、今後この経験をより多くの方に伝えていきたいです。

【C班リーダー】 村田 希実（工学部社会デザイン工学科）

2011年3月11日。当時高校生だった私は実家の広島から真っ黒な津波が、津波から逃げようと走っていた車や町全体をどんどん飲みこんでいく映像をただ漠然と眺めていたのを今でも覚えている。あの日テレビ越しで観た映像の衝撃は忘れられない。

私たちがこれから社会に出て次の時代を築いていく矢先に起きたこの東日本大震災の事を、何も知らないまま社会人にはなりたくない。という思いから今回第四次派遣隊として東北に行くことを決意した。

派遣隊が毎年訪れている南三陸町の町は、綺麗な道路が整備されガレキなどの山もなく更地が広がっていた。盛土工事のため重機が土を盛っていたりと、町がまさに新しく生まれ変わっている途中といった印象を受けた。

私が今回東北に行って一番衝撃を受けたのは、こういった町の姿である。三年が経ち道路なども整備され、一見復興されているように見えても、何よりも重要な人々の生活が町から消えている。未だ、津波で流されてしまった町には人の生活が戻ってきていないのである。仕事もなく、今回の地震を教訓にし、町の土台を高くするための工事をしているので人が住める状況ではないのは理解できるが、自分の故郷がなくなり、姿を変えてしまうというのはどれほど辛いことだろうか。盛土工事は元あった町の姿を基盤から全く異なるものに変えてしまうだろう。もう二度と自分の生まれ育った故郷の景色を南三陸町の人々は見ることができないのだ。また、活動4日目は牡鹿半島でホヤ貝の養殖をしている漁師さんのもとでお世話になった。牡鹿半島の海は青く透き通っておりとても綺麗だった。しかし、漁師の方々のお話を聞くと、3.11以降、牡鹿の海は姿を変えてしまったという。透き通っていた海水は濁り、三年経ち少しずつ濁りはなくなってきたそうだが、「昔はもっと綺麗だったんだよ！こんなもんじゃないんだよ」と、話してくれた。私にはその声が寂しそうに、そして悔しそうに聞こえた。東日本大震災は人の命だけでなく、東北の人と一緒に寄り添ってきた町や豊かな自然まで奪っていた。

福岡に戻ってきて、東北について一番質問されることがある。

それは、“まだボランティアってやることあるの？”という質問である。逆になぜもうボランティアすることがないと判断しているのだろうか。ニュースで東北の事を見かけることがないこと、また九州が東北から遠いという点も少なからず影響していると思った。震災に無関心、どこか他人事なのである。3.11は自分たちとは遠く離れた東北で起きたことになってしまっているように感じた。

そして、南三陸町に滞在中、私の故郷である広島で土砂災害が起きた。

日を追って増えて行く死亡人数。朝のニュースでは6人だったのに夕方のニュースでは2ケタにまで増えていく。とはいえ、自分の実家からは離れた地域での災害であったので、特に心配はしていなかった。しかし携帯を開くと高校の親友宅が被害にあっていたり、全国区のニュースでは報道されていない地域も被害があるということを知り青ざめた。なぜなら、自分の実家も山沿いなので土砂崩れが起きてもおかしくない地域だからだ。母親に電話をかけても全く出ず、もしかしたら…。という不安に駆られすごく怖かった。ボランティアをする側として東北にやってきたが、もしかすると自分もボランティアされる側になるかも知れない。そう思うと、私がボランティアするという行為に対してどこか余裕をもっていたことに気がついた。ボランティアを必要としている人は気持ちに余裕などなく必死なのである。自分のボランティアに対する意識に情けなくなった。そして上山八幡宮の工藤真弓さんの言葉を思い出した。東日本大震災で経験した自分たち東北の人間が、次に起きうる日本各地の水害、天災の模範になっていかなければならない。という言葉である。

私たちは東日本大震災からもっともっと多くのことを学ばなければいけない。そして次へ活かさなければならぬ。福岡でもいつ何が起きるかわからない。もし自分の身に家族の身に、大切な人の身に、何か起きた時、東北にボランティアに行ったことがあっても、私たちは東日本大震災での教訓を活かすことができるだろうか？難しいことではあるが、私たちはいざというとき、動けるようになっておかなければならないと強く思った。防災、減災の意識を持つことの大切さを教わったと同時にこの考えを周りにも広めていかなければいけない。

【C班副リーダー】 細井 雄太郎（工学部社会デザイン工学科）

震災が起きた当時、毎日のようにニュースや新聞で取り上げられていました。しかし、私はものすごく大変な出来事が東北で起きたのだ。とあまり関心を持っていませんでした。大学生になった今、授業中に東北で起きた地震による津波の映像を見て衝撃を受けました。その映像には、飛行機やタンクなどが流されていて信じられない内容ばかりでした。そのようなことから、自分でもどこか東北のことが気になって今回の東北ボランティアに参加させていただきました。

今回、東北ボランティアでたくさん感じることもあり、たくさん考えさせられました。仮設訪問で、ある男性が明るく楽しそうに笑いながら色々な話をしてくださいました。でも、震災の話になると表情が変わり、暗い顔つきになり、目線を変えずに下を向いて話をしていました。私はまだまだ震災でのショックは癒えていないし、明るいのは上を向いて前進して震災でのショックと戦っているようにも思えました。あの表情や雰囲気は忘れることは出来ません。

私は東北ボランティアに参加させていただいて、印象的だったことがあります。ひとつ目に、人ひとりのもっている力の大きさです。漁業支援でホヤの養殖のお手伝いをさせていただいた時に、バスの運転手さんも手伝ってくださり作業がスムーズに進んだことを覚えています。よく、人ひとりでは微力と言われますが、私は決してそんなことはないと思います。人ひとりの力が加わることで色々なことが出来ると思います。改めて、人が持っているパワーの大きさ、偉大さを感じる事が出来ました。ふたつ目に現地の方々の笑顔です。私は東北ボランティアに行く前、誰かに笑顔を与えるのもボランティアのひとつだと思っていました。しかし、実際に現地に行ってみると、私が笑顔をもらいました。皆さんものすごいエネルギーを持っていて小学生には手を焼くほどでした。また、現地で方々は、九州で起きた豪雨のことを心配して下さいました。それほど現地の方々は優しく暖かくて心の広さや強さを感じました。

最後に、私は東北ボランティアに参加させていただいて、考えさせられることがたくさんありました。今でも考えているし、これからも考えると思います。でも、人ひとりのもっている力の大きさを信じていこうと思います。

山城 麻生（法学部経営法学科）

2011年3月11日から3年半経った今、メディアでは復興は大きく進んでいると報道されているように思います。私自身もこの第四次派遣隊に参加し現地に足を運ぶまでは、そのように思っていました。しかし、実際に自分の目で直接見てみると、復興はまだまだ進んでいないように感じ、その進んでなさに驚きました。私たちが移動している時も復旧作業のトラックがたくさん通っていました。確かに

毎日復旧に向けての作業がされています。しかし、震災からもう結構な月日経っているのに…と、それほど津波の爪痕が大きいのか、と思いました。

今回のボランティア活動で最も大変だと感じたのは2日目に行ったボランティアです。はじめにボランティアセンターに行きその日のボランティアの内容や場所が知らされます。まずここでボランティアセンターに集まっていた人の少なさに驚きました。私たち福岡大学生を合わせても40名ほどでした。夏休み期間のため学生がほとんどでした。普段の平日はほとんど人がいないと聞きました。震災直後はあふれる程の人がボランティアセンターに集まっているのをテレビで見たのを覚えています。まだまだボランティアの協力が必要なのにやはり震災から時間が経っているので風化してきているのか、と感じ私たちは微力かもしれないけどやはり意味があるんだな、と実感しました。

そしてこの日のボランティアは20名ほどでこれから畑になる区画で横一列になりピッケルで固い土を掘り起こし大きな石や岩を取り除くものでした。この大きな岩が重機を壊してしまうためひとつひとつの手で取り除かなくてはなりません。土はとても固く強い力を込めないと掘れず、苦戦しました。5時間程度この作業をしましたが3、4mくらいしか進めることができませんでした。3年半たった今でもこのような復興の初歩的な作業で、更地の場所や壊れたままの堤防などもまだまだたくさんあります。

私はこの5日間を通しての見た東北の今の現状や現地の方々から聞いた貴重なお話を福岡に戻ってより多くの人に発信していきたいです。そして今回のボランティアだけで終わらせず募金活動など福岡でもできること、そしてまた東北に行き継続的に復興に向けて協力していきたいです。

黒岩 愛佳（経済学部経済学科）

東北についての私の第一印象は色が無いと感じました。仙台空港からだんだんと南三陸町に近づくにつれどんどんと景色が変わっていくのを感じました。茫々と雑草は生えたまま、新しい建物は立っていない、ポツンと残された鉄骨だけの防災対策庁舎やガソリンスタンド、津波によって枯れた木々、倒れかけた電柱、地面には震災の爪跡を残すガラスの破片、復旧のために走るトラック…など人の生活する声が聞こえない静かな町がそこには広がっていたのです。さんさん商店街の資料館の中にあつた3年前の南三陸町と比べてみるとまだまだ復興、いや復旧すら進んでいないと思うほどでした。この光景をみて改めて私は東北に実際に来てよかったと思いました。なぜなら東北の復興が進んでいると私は勝手に思い込んでいたからです。また上山八幡宮の工藤真弓さんや、4日目の漁業支援のときにお世話になった漁師さんから震災当時や震災直後のお話を直接聞く機会もありとても貴重な時間となりました。現地の方から伝えられた言葉は一つ一つに重みがあったのですが、中でも私が強く心に残っているのは「東北が次の災害の模範になる」という言葉です。こんな言葉をいうことができる東北の人を私は本当に強い人だと感じました。他にも椿物語の紙芝居、風評被害の話など現地の人からしか聞けないことを学ぶことができました。

東北は道路など目に見えるところは復興が進んでいますが周りを見渡せばまだまだ手が届いていないところもたくさんあります。だから今回私たちが被災地を見て感じたこと、聞いたことを伝えることはもちろん、それを次に聞いた人が東北のために何か行動しなければと思うようなことをしなければいけないと思います。そして今の小さな子供が3.11のことを忘れないように、風化を防ぐことが私たちの役目でもあると思います。東北が復興、新生するまで時間はかかるかもしれませんが、これか

らも応援していきます。第4次派遣隊としてこの活動に参加することができ本当によかったです。ありがとうございました。

坂本 晋也（経済学部産業経済学科）

私が今回の東日本災害ボランティアに参加した理由は何の波もなくただ過ごしてきた大学生活の中で何か思い出に残る、これから自分が変わることがしたかったので応募しました。去年の募集の際にも参加しようか迷った挙句締切日が過ぎてしまいました。だから今年、もしまた募集があったら今度こそ絶対に参加してやるという強い気持ちで臨んでいました。また、他大学でボランティアのサークルに入っている友達の話や活動を聞いたりして自分もやりたいなと思ったのも参加したきっかけの一つです。

活動内容は主に清掃、ガレキの撤去、そしてC班のメンバーの一員として漁業支援の作業に携わりました。清掃活動は上山八幡宮の境内の草を刈ったり、また椿物語復興プロジェクトとして植えられている椿の周りの草を刈る作業を行いました。蚊が多くて何ヶ所か刺されましたがみんなの力でスムーズに終わることができ、きれいになった道を歩くと達成感も得られました。ガレキの撤去は土の中に埋もれた石などを取り除く作業を行いました。始める前までは余裕たっぷり全部終わらせてやるという気持ちだったのですが、いざやってみると大変でこれは一日では終わらないなとすぐに分かりました。休憩などもはさみ3時間くらいの作業の中で進んだのはわずか5メートル程度でした。私たちが作業した畑の他にもたくさんの畑がありこれを終わらせるにはまだ時間がかかると痛感しました。漁業支援ではホヤの養殖をするための牡蠣の殻を紐に通していく作業を行いました。地道な作業ではありましたがこういうことは好きなので集中してどんどん進み、お世話になった方たちも親切で楽しく作業することができました。

この5日間を過ごしてとてもいい経験ができたと思っています。テレビでしか見たことのなかった場所を実際に訪れてみて生で見ることによりその迫力を感じました。大勢の人を飲み込んでいった津波の怖さを感じさせられました。道もやっと新しくできたという感じでした。周りはトラックが行き交い震災から3年経ってもまだ人が住めるような状況ではないということに気づきました。最近では東北の他にも広島や北海道で土砂による災害に見舞われ、長野では山が噴火するなど被害が相次いでいます。復興するには人の力が必要不可欠であり続けていくことも大切です。そのためにささいなことでも自分にできることを考え行動できるようにしたいです。

水野 美祐（商学部貿易学科）

私はこの5日間の派遣から復興には時間がかかるということを身をもって実感しました。震災から3年が経ち、以前に比べるとテレビや新聞で取り上げられることが少なくなり、私自身意識して知ろうとすることもなく、私の周りの人も復興はほぼ終わりかけていると思っているようでした。そのため実際に現地へ行き、現状がどうなっているのか、私にできることはなにかを確かめたいと思い参加しました。特に今回、心に残っているのが漁業支援に行った際、バスの運転手さんが言った一言でした。「復興はただ元の状態に戻せばいいということではない。次に津波が来たときにも対応ができるように改善して戻すのが復興」ということをおっしゃっていました。たしかにいたるところで工事がなされ

ていて、3年たった今でも傷跡が残っているところはたくさんありました。それらも元に戻すだけでなくすぐに終わっていたはずですが、将来を考え海拔を高くすることで時間がかかっていることを知りました。また、防災庁舎や流されてしまった小学校を見に行きましたが、これらは観光になっているのではないか、現状を知るといふことと観光の違いはどこにあるのかなど新たな疑問も生まれました。実際、防災庁舎には次々に大型バスが来て多くの人が見に来ていました。もちろん黙祷をささげていましたが、見世物のようにになっている気がしないでもなくどこまでがいいのか葛藤が出てきました。それと同時に、この二つの建物の周辺には依然として食器の一部や上靴など当たり前のよう生活していた跡が残っており、津波が一瞬にして日常を奪い去ってしまう恐怖も感じました。さらに、漁業支援では人手が足りておらずボランティアの学生も最近ではめっきり来なくなったということでした。しかし、最初は上手く作業ができず足手まといになり本当に役に立っているのかと悩んでいましたが、5人増えただけで作業スピードが上がったため微力ながら協力できたと思えたとき、ボランティアは相手だけでなく自分の喜びにもつながるのだと感じました。今回の経験でボランティアとはなにか、自分たちの自己満足ではないのか、などのこれからも考えていくべき課題を見つけましたが、それ以上に学べたことは多くありました。これらを安全に活動し、学べたのは学生課の方をはじめ、多くの方の支えや派遣隊のメンバーがフォローしてくださったおかげです。派遣に関わったすべての方に感謝しています。私は私にできること、福岡という土地に住んでいるからこそできることもたくさんあると思います。今回学んだことや現状を積極的に周りに伝えていきたいと思っています。そして一刻も早い東北の復興を心よりお祈りしています。

龍造寺 丈一郎（商学部第二部商学科）

2011年3月11日の東日本大震災の報道を見たとき、当時高校3年生だった私はただ言葉を失い、立ち尽くすことしか出来なかった。

今回の第4次福岡大学派遣隊の募集記事を見たとき、テレビで見たあの光景を思い出し、少しでも復興の力になりたいという気持ちと何も行動出来なかった今までの自分を変えたいという思いから参加を決めた。

メディアで報道される事も少なくなっているため、復旧は進んでいると思っていた。

しかし実際に被災地を訪れると瓦礫や無惨な爪跡が残っていた。

南最知の仮設住宅を訪問したとき、被災者の方々は震災時に目の当たりにした衝撃的な光景や震災直後のモラルの低下によって発生した問題など、私達が知り得なかった体験談を語ってくれた。その中で一番印象に残っているのは『頑張れと言われても何を頑張ったらいいのか分からない』という言葉である。何から手をつけたらよいかも分からないほどの絶望を経験したその方に対して、返す言葉が見つからなかった。その後も防災の大切さなどについて話をしてくれた。東北学院大学では交流会をした。同年代の学生のスピーチはより一層、心に響くものがあった。彼らは震災をただ悲観するだけでなく、どうにか自分達の故郷を取り戻そうと精力的に活動している。その行動力や企画力、計画性はとても高く、同年代とは思えない程しっかりしていて驚かされた。今回、派遣隊として東北に行き、現地の方々とふれあうことで強さ、優しさを肌で感じる事ができ、とても有意義で貴重な体験になった。私達が福岡で出来ることは、今回の出会い、繋がりを活かして現地の方々の思いや被災地の現状を広めていくと共に継続的な活動をすることである。

井田 愛（理学部応用数学科）

今から約三年前の3月11日東日本大震災が起きました。当初メディアではほぼ毎日のように津波で一瞬のうちに人や街を飲み込み東北に住む方々の暮らしを奪っていく様子、大切な人を亡くした方々の悲痛な叫びなどが放送されていましたが、三年たった今テレビや新聞で取り上げられることは少なくなりました。しかし私はこの東日本大震災は日本人として忘れてはいけないことだと思うし、風化させてはならないと思いました。では風化させないためにはどうしたらいいかと考えたところ、やはり直接自分の目で今東北がどうなっているのかを確かめないと何もはじまらないのではと思い、このボランティアに参加させていただきました。

まず現地で感じたことは、本当にここに人々の暮らしがあったのだろうか。ということでした。瓦礫はほぼなくなっていたのですがそこにあったのは建物など全くなく、ただ草だらけの空き地が広がっている状態で、津波が来る前までは普通の生活があったとはとてもすぐに信じることはできませんでした。

また小学校の跡地には上靴やバスケットボール、机などがそのまま残っていて津波が来る前までは普通の学校生活を送っていた子供たちがいたことを物語っていて、それが津波によって一瞬で奪われたのかと思うと全身に鳥肌が立ち、津波の恐ろしさ、震災の恐ろしさを肌で感じました。

その小学校は壊れたまま残されており、もうその校舎で震災前のようにみんな揃って授業を受けることは二度とできません。突然奪われた多くの尊い命。実際にその場に立ちその方々を思うと涙が止まりませんでした。

今東北は少しずつ復興へは向かっているものの、本当の復興はまだまだだと改めて感じました。私たちは5日間ボランティアをさせていただいたのですが草刈にしても瓦礫撤去にしても一日かけて進んだのはほんの少しだったと思います。しかし人ひとりの力がどれだけ大切なのか、継続することがいかに必要なのかを実感しました。復興にはまだまだ人の力が必要でそのためにも私はもっとたくさんの人に東北のことを知ってもらう必要がある、そして今回の活動のことについて、東北のことについてより多くの人たちに発信するのがボランティアに行かせていただき、東北のお世話になった方々への恩返しであり、使命だと思っています。福岡という東北から遠く離れた場所ですが、できることはあると思うのでそれを考え、実行しながらこれからの生活を送っていこうと思います。

今回のボランティアを通じて東北の方々のあたたかさやふれ、笑顔を見て、改めて東北の方々の強さを実感し、同時に感謝の気持ちでいっぱいです。

「明日が来る当たり前」をあたりまえと思わないこと。学校に行けば友達と笑いあい、一緒に授業を受けられることがどんなに幸せなのか、今私が生きている今日が震災で亡くなった方が生きたかった今日なのだといつも心にとめて今日の前にある当たり前の日々を大切に生きてゆきたいと思います。そして人と人との繋がりを大切にしていきたいです。

中村 敏之（理学部地球圏科学科）

「被災地の方と共に生きていくこと」が我々に課せられた命題である。

今回の研修で一番考えたことは、政治についてです。現地の方々は3年半の時間が経過し尚、自分たちの生活を取り戻そうと必死で頑張っています。多くのボランティアも同じです。しかし、私たちで行えることには限界があります。現地に赴き、被災地の状況を目の前にして、最終的には政治の力が

必要なのだと感じました。多くの人は「復興」を考えると、現地の人の生活をもとに戻すということを考えると思います。確かに、そのことも大事ですが、復興という長い期間で考えると必ず政治の話になるので、私たちは日頃から政治について考えなければならないと思いました。

マスコミ・報道も被災地から離れつつある今、東北を忘れないで寄り添って生きていく必要があると捉えます。九州は関東・関西・北海道に比べ節電意識もまだまだ低く、関心が高いとは言えない。九州にいつ災害が起きてもおかしくはない。東日本大震災レベルの災害が起きてから考えていては遅い。自然の脅威から普通の生活を守るためには「防災意識の高さ」が必要である。そして、日頃から節電意識を持ち続けることが必要である。

私達で私達の社会を作っていく、変えていくという意識。我々、若い世代が動いていく必要があると思います。

青柳 大地（工学部電気工学科）

私は、今回初めて第4次派遣隊として5日間宮城県でボランティア活動をさせて頂きました。

実際に現地に行く前、メディアでしか被災地の現状を把握することができなかったために、正直漠然とした考えで事前研修に参加していました。

しかし宮城県に着き南三陸町に向かう途中、草が無造作に生え、その下に少ししか残っていない家の基礎、まるで草原のような光景に言葉が出なかったのと同時に、テレビ画面を通してではこの状況は絶対にわからないなと感じました。

この活動の中で最も印象に残っていること、それは大川小学校に行ったことです。

大川小学校の校庭で、破れたシャツ、泥だらけのズボン、片方だけの靴、これらを見つけ、当時の小学生、先生方の状況や心情を想像したとき、言葉に出来ない感情が押し寄せてきました。

今、その大川小学校で亡くなった児童の遺族の方々が宮城県、石巻市に対して訴訟を起こしていると知り胸が痛み、被害者同士の争いは酷だなと思いました。

そして今回私はプログラム系のグループだったので現地の方とお話させていただく機会が多かったのですが、その中でもお世話になったバスの運転手さんとお話しさせていただいた際、「バスによる被災地を巡るツアーなどは好きではない、これは見世物じゃない。その行為が心の傷を舐めてしまう」という言葉を聞いて、実際に被災した方が受けた心の傷はどれだけ月日が経とうと癒えるものではないと強く感じました。そしてもう一つ印象に残った言葉は「流された家のローンも支払わなければいけない人もいる、でも仕事がなく自己破産する人もいる、お金の問題はかなり大きい。でも地元の人には怒りよりもしょうがないという気持ちで、みんなそうなったから腹が決まるのが早かった」という言葉です。

津波に遭い家が流され家族とも離れ、想像もできないくらい辛い状況にもかかわらず、前を見て進んでいる。現地の方々は心がとても強いなと感じました。

震災から約3年半が経ち、メディアで取り上げられることも少なくなりつつある今、自分たちに来ることは実際に現地を感じた数々の思い、そして被災地の現状を自分の周りの人たちに伝えること、福岡からだ協力ができることは限られていますが、その中でも継続し続けること、そして福岡で大きな地震が起きた時の対処法を事前に考えておき、実際に地震が起きたとき周りにいる人たちを少しでも救うことが出来たらいいなと思います。

2. 引率者レポート

佐藤 基治（第4次福岡大学派遣隊隊長 人文学部学生部委員 人文学部教授）

2014年5月から8月にかけて東日本災害ボランティア第4次福岡大学派遣隊のメンバーとして活動した。もう随分と長い年月を生きてきたが、その間ボランティア活動の経験は無く、今回、慌てて勉強したり、考えたりした。そんな初心者が考えたことの記録も何かの役に立つかもしれないと思い、ここに記録しておく。

『ボランティア活動』とは何か。ここから始めた。厚生労働省によれば、ボランティア活動とは「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」を指す。命令や義務、仕事で行うのではなく、自分がやりたいからやる主体的な活動であり、しかも他人や社会のためにならなければならないことがわかる。

「社会問題の解決や必要とされている活動を理解・共感し、勤労とは別に労働力、技術、知識を提供すること」という記述もある（中谷茂一、2008）。活動の目的や意義を理解し、それに共感して、自分の持つ労働力や技術、知識を使用することがボランティア活動には必要とされている。

ボランティア活動の要件として「自発性、無償性、利他性、先駆性」を挙げることもある。先駆性が要件であるといわれるのは、既存の社会システム、行政システムにはない機能を、創造的で自由な発想で補完する役割を活動が担うことから発生したものである。何が必要とされているかを一人一人が自分で考え、探し出さなければならない。

5月中旬から7月にかけての月曜日に、10回ほどの準備会議を開催した。準備会議では第1段階として前述した『ボランティア活動』を実現するために、昨年度の東日本ボランティアの参加者の経験談、ボランティア活動全般に精通した方の講義、医療関係者の視点からの活動へのアドバイス、救急隊員からの現場での注意などを受けた。

第2段階として被災地で何が必要とされているか、被災地で自分たちに何ができるかを議論した。時間経過とともに必要な活動が変化していることが予想され、それを踏まえないと誰のための活動であるかを忘れたものになる。「自分の持つ労働力や技術、知識を提供する」ために「自分の持つ労働力、技術、知識」を明確にして、必要とされている活動と照合する作業も必要であった。

第3段階として、持ち物リストを作成する、破傷風の予防接種をする、手袋と安全靴を準備する、高齢者のためのマッサージの練習をするなど具体的な準備をおこなった。これらの準備の後、8月19日に仙台に向けて出発した。東日本災害ボランティア第4次福岡大学派遣隊の現地での活動の様子は他の隊員の報告に任せることにする。

最後に今回の活動の成果を報告する。今回の活動では3つの目標を設定した。第1の目標は、当たり前のことではあるが「被災地や被災者に貢献すること」であった。約1週間という時間的制約のある現地活動ではあるが、この目標は達成出来たものと思われる。

第2の目標は、活動を通して「自分自身を成長させること」であった。自分で考え、行動する、主体的な大学生に成長することが目標であった。リーダーの指示に従うことと自分で考えて行動することのバランスが取れている様子から、この目標もまた達成できているように感じられた。

第3の目標は「東日本災害を風化させない」であった。時間は「復興」とともに「風化」をもたらす。「東日本災害を風化させない」ことは、災害後3年を経て、とりわけ重要な活動である。幸いにも、大学は1年毎に学年が進んでいくために、様々な場面で次の世代へ引き継ぎをすることが習慣になっている。今後も東日本災害ボランティアを継続し、活動のバトンを次の世代に渡すことによって、第3の目標を達成できると考えている。総じて有意義な東日本災害ボランティア第4次福岡大学派遣隊の活動であったと言えるであろう。

三浦 和也（学生課員）

昨年度に引き続いて派遣隊の引率をした。企画の成功と学生の安全確保はもちろん、自身をもう一度見つめ直す場として臨んだ。第4次派遣隊の運営担当者として、派遣隊員の募集、事前研修、現地での活動、事後の活動報告会の実務を行い、8月19日から5日間、宮城県南三陸町を拠点に活動を行った。震災発生から4年が経過し、ガレキの撤去はほとんど終了しているものの、南三陸町のかさ上げや迂回道路等の震災復興工事が着々と進んでおり、1年前の風景と様変わりしていた。民家の建築については、震災工事が終了しないと着工できないということで、依然として人の気配は少なく、本当の意味での復興は長い道のりであることを再認識した。

過去の活動でお世話になったところでは、上山八幡宮、南三陸町災害ボランティアセンター、気仙沼市南最知仮設住宅や面瀬小学校などを訪問し、活動の継続性を意識して取り組んだ。公務多忙の中、南三陸町長にお時間をいただき表敬訪問させていただいた際には、「今年度も南三陸町へ遠く九州からお越しいただき深く感謝しています。今年度末で南三陸町災害ボランティアセンターが閉鎖となり、通常業務に戻っていく中で、少しずつ復興の歩みを進めている状況です。今回の活動での体験や経験を持ち帰った後に、家族や友人に伝えていくことが私たちの願いです。」という言葉をいただいた。表敬訪問した学生からは、「今回の目的を再確認するとともに、改めて身が引き締まった」と熱い決意を述べていた。

また、昨年同様、東北学院大学（宮城県）を訪れ、現地の学生とワークショップ形式での交流の機会をいただいた。交流会では、東北学院大学ボランティアステーションで活動する学生の活動状況を拝聴し、「ボランティアを通じて学生は何ができるか」というテーマでグループディスカッションをさせていただいた。様々な人々との出会いを通じて、ボランティア活動に従事し、復興の一端を担うことができ充実した5日間を送ることができた。

今回、7学部総勢32名で活動に臨んだが、うち1名が第3次派遣隊の参加者だった。震災から4年目を終えた現在でも、本学には、「誰かのために何ができるか」という奉仕精神が、本学学生のなかに日々醸成されてきていること、過去に参加した学生が、震災を風化させず、再び貢献したいと参加してくれることを誇りに思う。

今回の派遣隊は、有意義な活動であったとともに、派遣隊32名の今後のますますの活躍を願う。

江頭 学 (学生課員)

4年前の3月11日、卒業式を控えた私はあの悲惨な災害をタイで知った。「日本で大きな地震があったそうだよ」と現地のタクシーの運転手から聞いた。とはいえ、そこまでの被害はないだろうと安易に思っていたのだが、翌日、空港のテレビで目にした光景を疑った。映画でしか見たことのないような津波が次々と家や人を飲み込んでいく。海外でもテレビはあの大地震のことばかりであった。

就職して、学生を東北へ派遣すると決まり、行きたいという気持ちはあったものの行けず、第4次派遣隊でやっと思うことが出来ました。

あれから4回目の夏。「東北のためになにができるだろうか。」昨年度第3次派遣隊で現地に行かれた三浦さんを中心に幾度となく、話し合いを重ねた。その時、被災地に行ったことのない無力さを感じた。現地に行く『機会がなかった』ではなく、行く『機会を作るべきだった』と思った。ニュースや新聞では被災地の様子をうかがい知ることが出来ても、現地に足を運び、自分の目で見て初めて本当のことがわかるということを改めて感じ、『機会』がないと私自身逃げていた。

しかし、学生たちの中には自分で『機会』を作り、東北の地を自転車で巡り、ボランティアをしていたのが、今回の派遣隊でリーダーを務めた、神崎くんだった。神崎くんは、初めて東北を訪れる学生が多いこの派遣隊の学生に東北の状況を伝えながら、リーダーシップをとり、一生懸命引っ張って行ってくれた。本当にありがとう。

この派遣隊は学生へ素晴らしい『機会』になったと思う。これを契機に学生たちは自分たちでも人の力になれるのだと実感でき、広島のと砂災害のボランティアへ行ったり、2015年3月11日に現地に行ったりしたのだと思う。この素晴らしい『機会』をこれからももっともっと人のために役立ててほしいと願う。

この1年で学生が一回りも二回りも人間的に大きな成長する姿を目の当たりにし、私自身もいい経験をさせていただきました。

最後に、人のために動ける人になってくれることを期待します。

5

活動でお世話になった方々からのメッセージ

佐藤 仁 様（宮城県南三陸町長）

早いもので、平成23年3月11日に発生した東日本大震災から3年10か月が経過しました。

ご承知のとおり、当町は、東日本大震災に伴う大津波により甚大な被害を受けました。しかしながら、福岡大学の皆さんをはじめとする世界中の大勢の方々から頂戴した多くのご支援や心温まる激励に応えるべく、町民一丸となって復旧、復興に向けた歩みを進めているところです。

自らの意思によって被災地で支援活動を行うということは、誰にでもできることではありません。この尊い活動や経験は、今後の皆さんの人生の「糧」となるものと確信しております。

福岡大学の学生さんには、どうか、今回の震災を多くの方々伝えることで、決して風化させないような活動を継続していただけたらと思っています。

今後も、皆さんが自身の夢や希望に向かって挑戦し続け、無限の可能性をいかんなく発揮されますようご期待いたします。大変ありがとうございました。

齋藤 貴恵 様（気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター【復興支援センター】職員）

東日本大震災後3年に亘り、継続的に気仙沼での「コミュニティ支援活動」のお手伝いを頂きありがとうございます。平成24年仮設住宅内での仲間づくりとして、住民の方々と共同作業（うちわづくり）を行って頂き住民の方々と学生さんとの楽しい思い出をつくることが出来ました。平成25年には、生活環境づくり（クリーン大作戦）のお手伝いを頂きました。

現在、復興のフェーズも変わり、住民の皆様の状況も変化しており災害公営住宅への申し込みをされている方、少しずつ自立再建をされている方がおります。

このたび福岡大学の皆さまには、福岡弁と気仙沼弁のコラボレーションした交流会をご依頼いたしました。交流会の中である住民の方が東日本大震災の話がされました。一緒にいた住民の方もあの日のこと、避難所での話、仮設での生活などまるで昨日あったことのように話しておりました。私は真剣に住民の方々の話を聞いている学生さんの姿に心を打たれました。

交流会の中で、住民の方が「同じ三陸でも若布の味が違うから待ってらいい」とご自宅から若布を持って来て学生の方と若芽の食べ比べなどをしてとても楽しそうでした。また、気仙沼弁の通訳をする方、そのまま気仙沼弁で話す方、福岡の名物に興味を持つ方、笑いのある和やかな交流会となり記念写真と共にまた新しい思い出が出来ました。学生の方を通して多くの出会いと体験をさせて頂いております。学生の方が集う場を開催して頂くことで日頃住民の方々から伺うことのできない生活状況や特技、役割を教えて頂いております。

人とひとが繋がり、役割をもって営まれる社会生活の大切さなど気仙沼で経験されたことが皆さまの今後の生活の中でお役に立てれば嬉しく思います。充実した学生生活とこれからのご活躍を心よりお祈りいたします。

菅野 勝美 様（気仙沼市立面瀬小学校学童保育なかよしハウス）

面瀬小学校の子供達一同、元気にやんちゃに過ごしております。福岡大学の職員、学生の皆様は夏とお変わりなくお過ごしでしょうか。

この夏は3度目の来所、照りつける日差しの中での除草作業等々本当に有難うございました。

学童の子供達は「待っていました！」と言わんばかりに、学生の方たちにお世話になりっぱなしでした。体育館で「サッカーをやりたい。」といった男の子達は、自分の口でやりたいことを伝え、受け入れてもらい、みんなで楽しく遊べたことが自信になったようです。その後皆さんに対しての言葉遣いが丁寧になっていました。少し成長させてもらったようです。これも「またね。」の言葉通り、続けて来所して下さったことで築かれた信頼が基にあったからだと思えます。皆さんの子供達への、気仙沼への思いに感謝します。

さて子供達は楽しい思い出を胸に毎日頑張っています。皆様にとっても、実り多い季節になりますようにますますのご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

佐藤 貞夫 様（特定非営利活動法人 P@CT代表）

昨年の8月22日に活動して下さった13名の皆さん、遠方から足を運んでいただき心より感謝いたします。

皆さんには古川沼での遺留品搜索の活動をしていただきました。行方不明の方の家族の元へ、また全てを流失してしまった方々へ、一つでも思い出の品を見つけてあげたいという想いで活動を続けてまいりました。暑い中での活動でしたが、皆さんが一生懸命探してくださっていたことを覚えています。古川沼も復興工事が始まるため間もなく立ち入り禁止となりますが、出来る限り活動を続け、一つでも多くの思い出の品を住民に届けられたらと思っています。

私自身も全てが初めての経験となり、未だに手探り状態の日々ではありますが、住民の声に耳を傾け、気持ちに寄り添いながら、活動を継続していきたいと思っています。

陸前高田市を訪れてくれる皆さんとのつながりが、私たちにとっての何よりの心の支えとなっていますので、これからも陸前高田を忘れず、想いをもち続けてくれることを願っています。

田中 愛生 様（NGO団体石巻応援団「おしか」代表）

ボランティアにご参加いただきまして、ありがとうございます。浜に来てすぐに養殖の仕掛けづくりをお手伝いする作業をしました。ホヤの養殖に使用する牡蠣の殻に穴をあけ、ひたすら紐を通す作業でしたが、意外と大変だったと思います。本当におつかれさまでした。

地元の漁師さんは、とても明るく元気な派遣隊の方々に「元気をもらえた。」「また来てほしい。」と、とても喜んでいました。

震災から3年半が過ぎ、これからさらに被災地の状況や必要とされる内容も変化することと思います。福岡大学派遣隊の皆様のように、いろいろな側面から復興について考え、発信し続けていくことが今後の復興において重要な役割を果たすでしょう。今後もよろしくお願い致します。

其田 雅美 様（東北学院大学）

東日本大震災発生から3年が経過し、記憶が忘却してしまうことは自然の摂理ではありますが、今回のようにこれからの社会を担う世代である大学生が交流することはとても重要な意義があります。お互いがそれぞれ、復興に向けての一助・力になりたい気持ちを持ち行動している大学生が結集、これからのボランティア活動、更に防災・減災分野へのフィードバックとなるような取り組みとして、微力ながら役割を果たす企画として機能したと私は思います。

こうした交流企画に参加した大学生の皆様にも今後の活動・活躍を期待するとともに、今回の企画に携わった福岡大学の皆様に厚く御礼申し上げます。また、この企画が持続可能なものとして位置づけられ、常に大学生の復興に関わる主体性を発展させるようなものとなるように願っております。

佐藤 司 様（尚絅学院大学）

東日本大震災は終わったでしょうか。復興は終わったでしょうか。

今回の福岡大学の皆さんが、宮城県と岩手県での3日間の活動や、東北の学生との交流を通して得たことは、“自分ごと”としての東日本大震災や復興であったと思います。私は、その気づきや言葉、感覚や経験が、無関心や風化を防ぐ唯一のものだと思っています。今回、遠く福岡の皆さんと“自分ごと”として復興を共有できたことに、とても感謝しています。

本学のボランティアステーションで大切にしていることとして3つの“つ”というものがあります。それは、“つながる”、“つたえる”、“つづける”です。この3つの“つ”は皆さんと気仙沼、南三陸、陸前高田だけで大切にするのだけではもったいないので、皆さんの周りの方々にも東北や全国へつながり、つたえ、つづけてくださるよう、共有してください。

東日本大震災や復興が終わったと言える日を皆さんと共に迎えたいと願っています。

【第4次派遣隊にご支援ご協力いただいた方々】

宮城県南三陸町長 佐藤仁 様

宮城県南三陸町役場の皆さま

宮城県南三陸町 上山八幡宮 禰宜 工藤真弓 様 権禰宜 工藤庄悦 様

宮城県南三陸町 災害ボランティアセンターの皆さま

宮城県気仙沼市 社会福祉協議会ボランティアセンターの皆さま

宮城県気仙沼市立 面瀬小学校校長ならびに教職員の皆さま

宮城県気仙沼市立 面瀬小学校学童保育なかよしハウスの皆さま

宮城県気仙沼市 南最知住宅（西）の皆さま

宮城県気仙沼市 南最知住宅（南）の皆さま

宮城県気仙沼市 南最知住宅（北）の皆さま

宮城県石巻市 NGO団体石巻応援団「おしか」の皆さま

岩手県陸前高田市 特定非営利活動法人 P@CTの皆さま

宮城県仙台市ボランティア団体 ReRootsの皆様

東北学院大学の皆さま

尚絅学院大学の皆さま

宮城県南三陸町 ホテル観洋 様

南三陸観光バス株式会社 様

トップツアー株式会社 福岡支店 様

福岡大学関係

東日本災害ボランティア第1次～3次福岡大学派遣隊引率者・隊員各位

※この他、多くの方々のご協力をいただきました。謹んでお礼申し上げます。

平成26年度 東日本災害ボランティア
「第4次福岡大学派遣隊」活動報告書

平成27年 3月 発行

発行 福岡大学学生課
福岡市城南区七隈八丁目19番1号
TEL 092-871-6631 FAX 092-873-2981



人をつくり、時代を拓く。

福岡大学